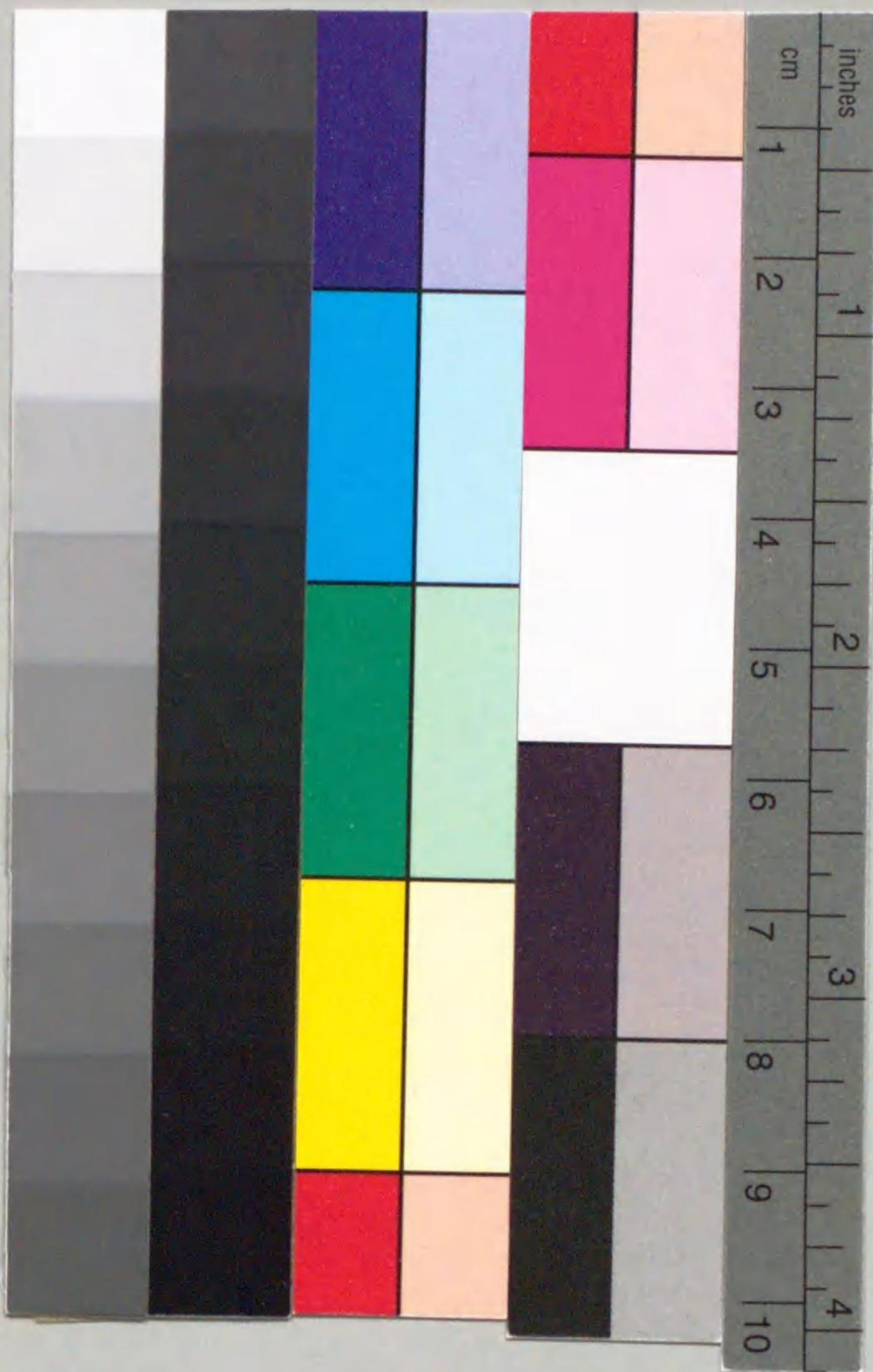


~~348~~
~~760~~



416

學習院助教

古谷義德著



少年論語讀本

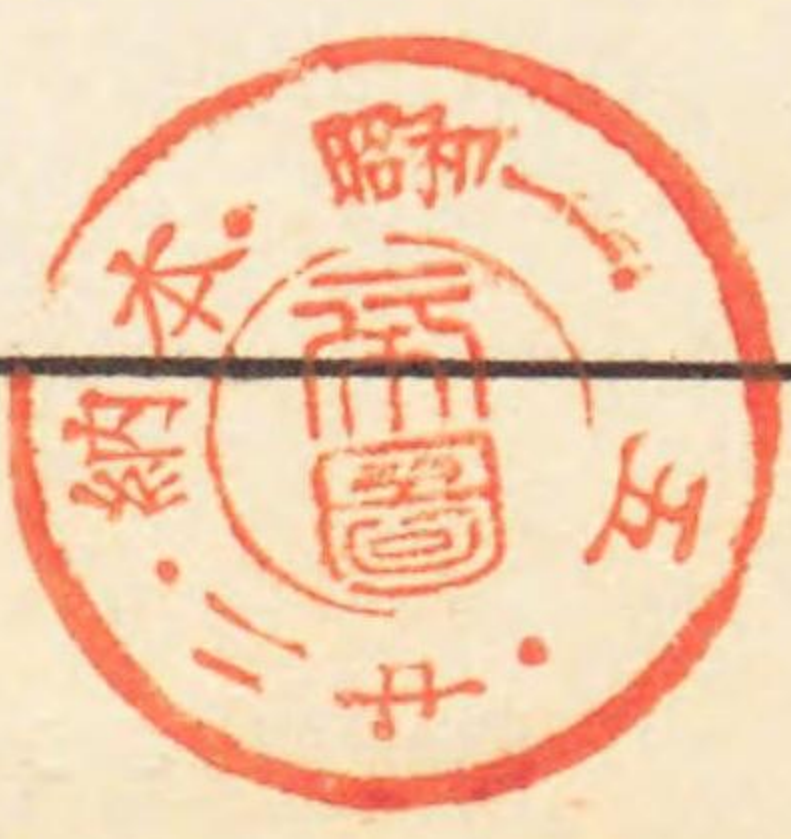
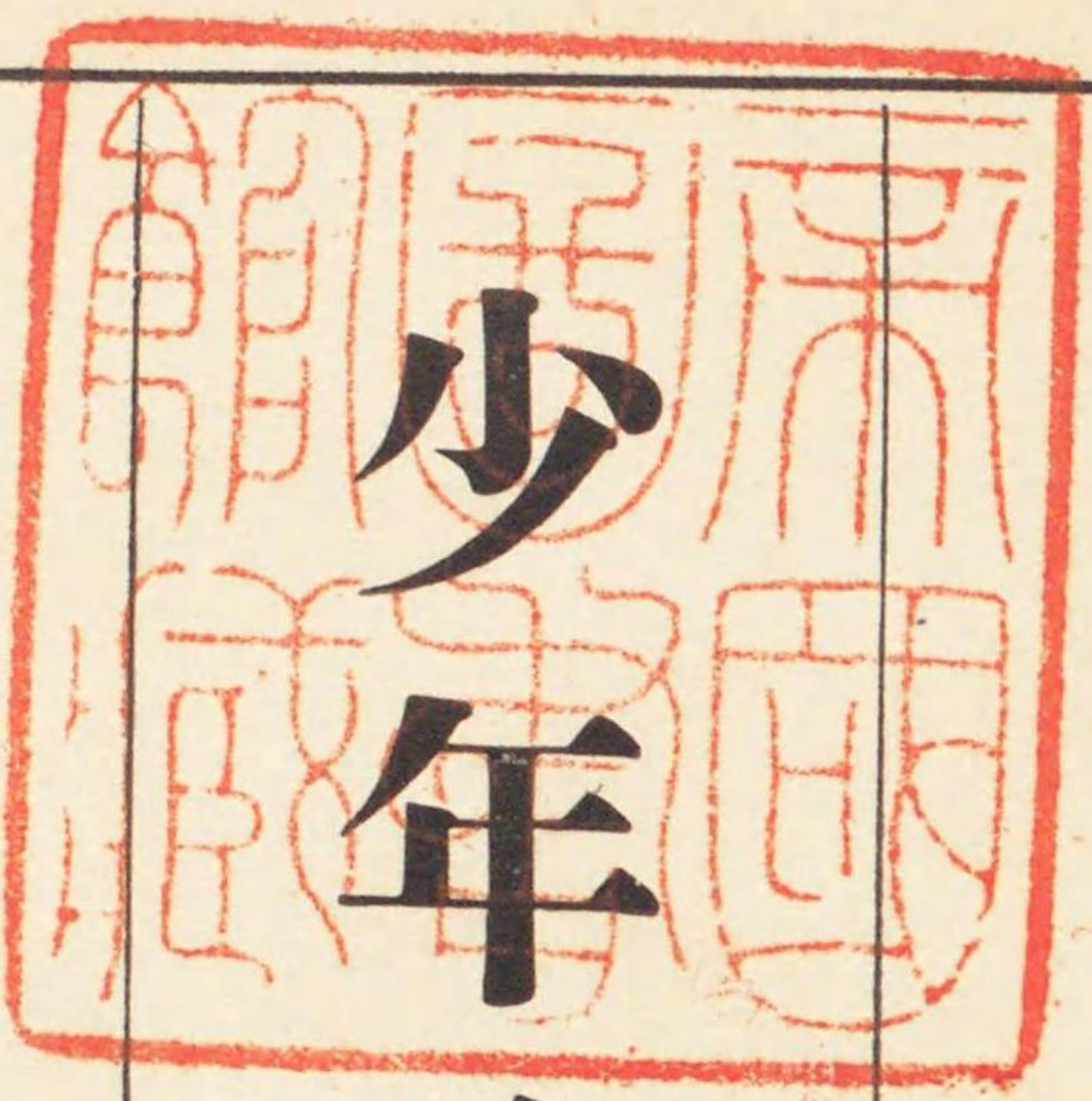


東京神田 大同館藏版

學習院助教授 古谷義德著

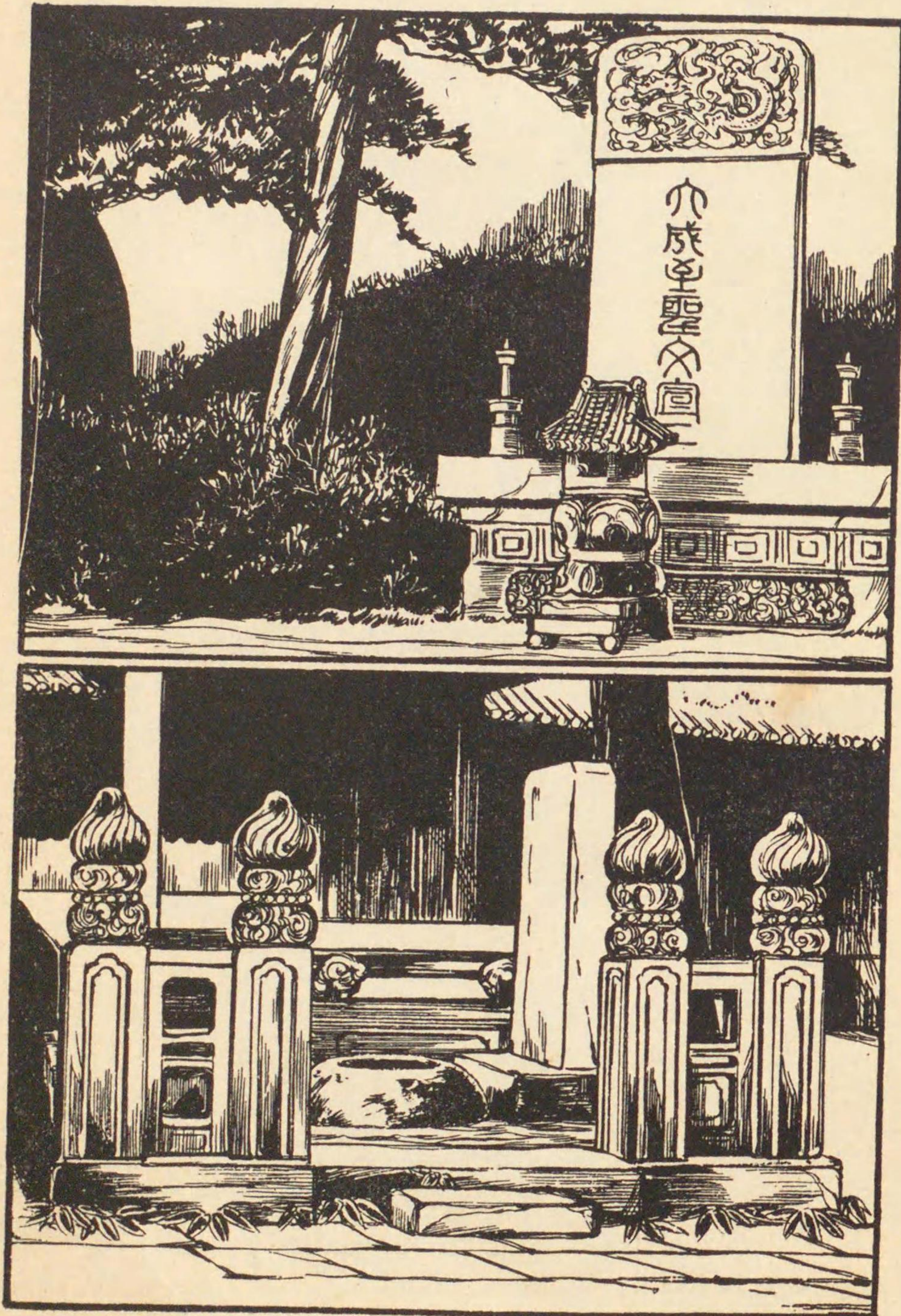
少年論語讀本

東京神田 大同館藏版



Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

曲阜城外孔子之墓

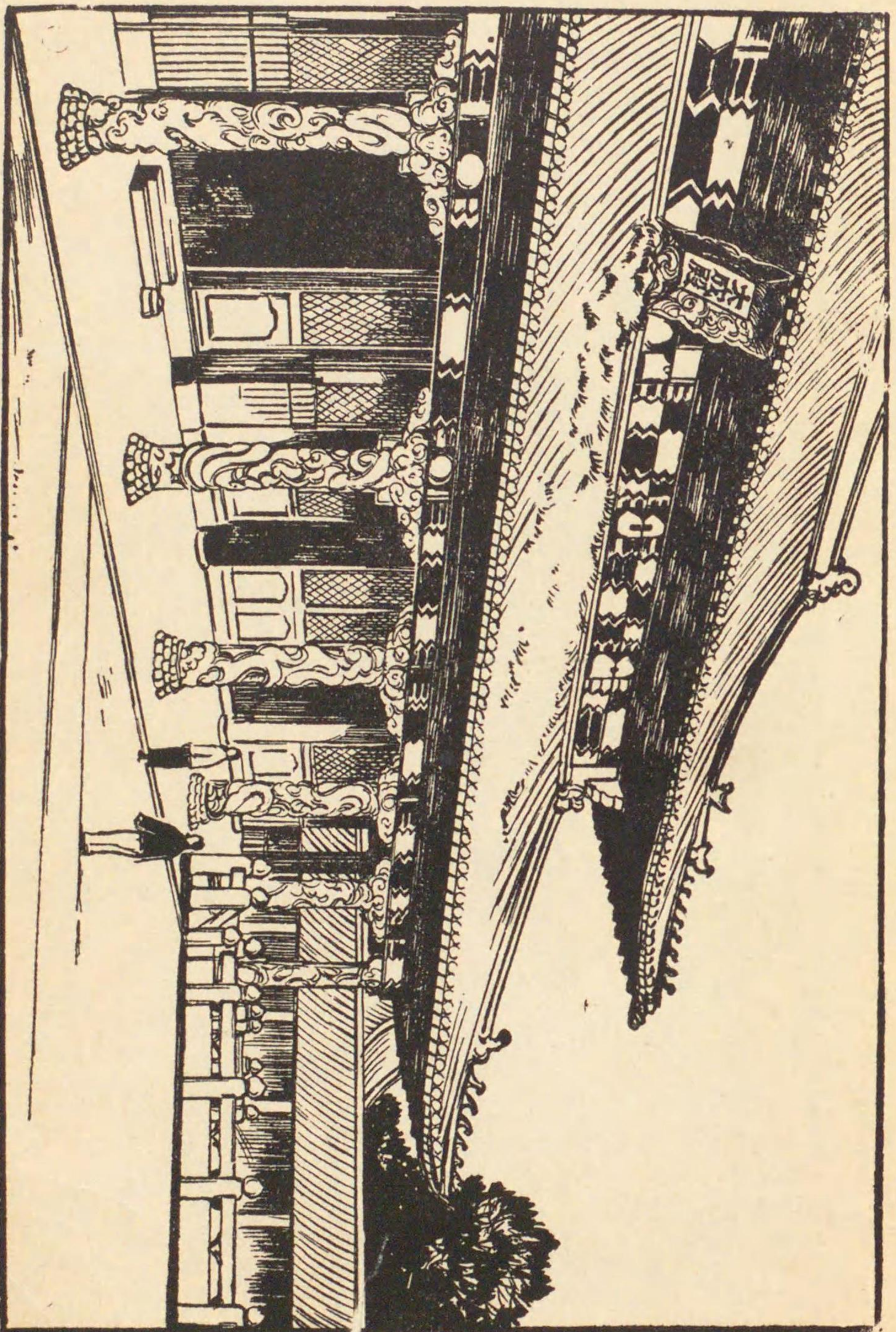


同孔子故居之井

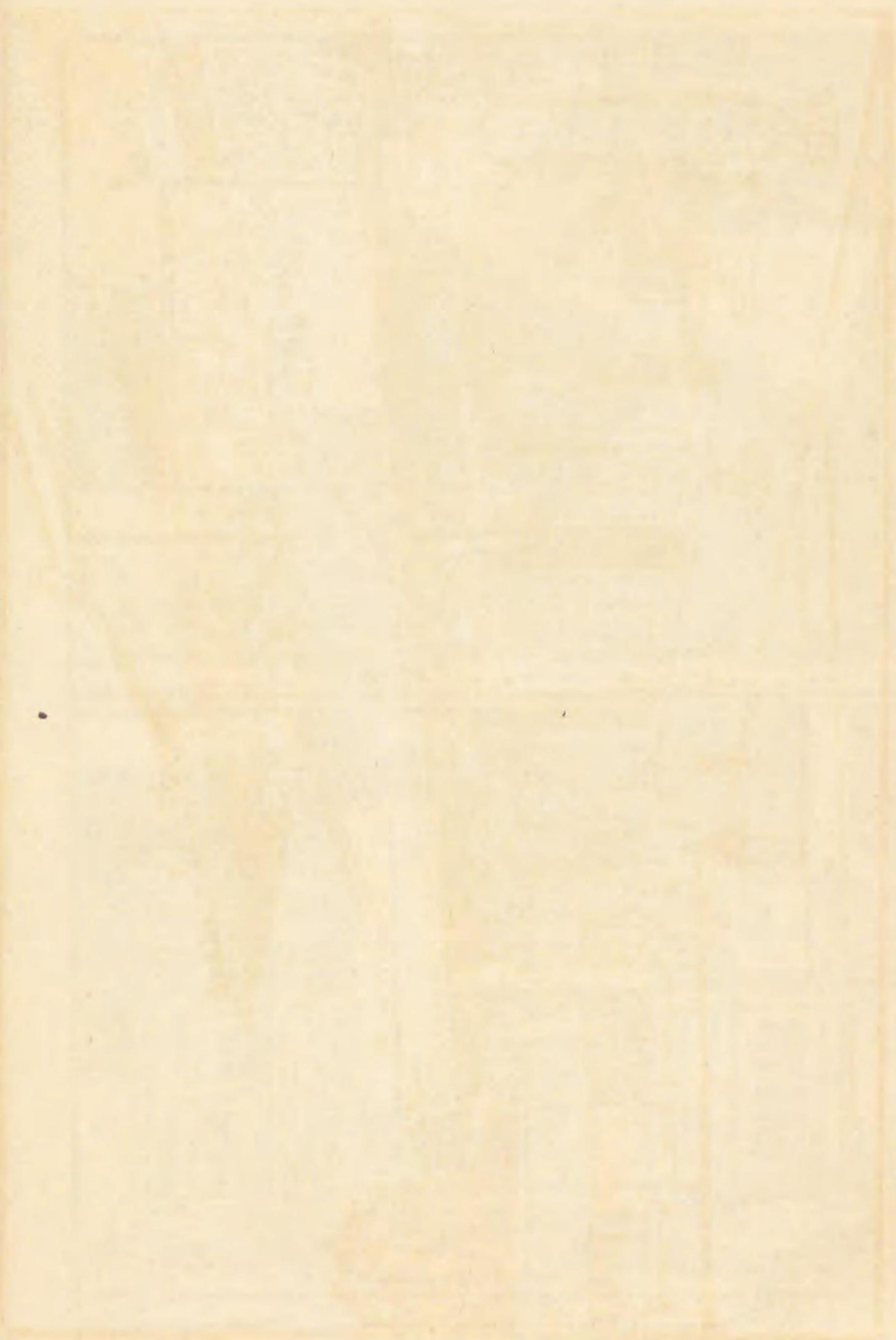
45
608



80W19936



支那山東省曲阜大成殿





支那山東省曲阜大成殿內孔子像に因る

この小書を

無形の然かも貴重なるものを

われに残したまへる

亡きわが兩親の

膝下に捧ぐ

少年論語讀本

序

一、學生の皆様へ

釋迦・孔子・キリストの三人は、世界三聖として古來廣く世人の尊敬崇拜を受けてゐる方々であります。

論語は實に是等三聖の一人たる孔子の言行を主として記したものでありまして、人の人たる道を説いた世にも貴い書物であり、全體は二十篇から出來てを一つて、各篇には又二十章も三十章も有益な言葉があけてあります。

さて此の論語は十遍讀めば十遍、二十遍讀めば二十遍といふやうに、讀む度毎に新しい味が發見されると言はれてゐるくらゐで、その人の經驗學識の進むにつれて成程々々と、その眞理のあるところに一入心服させられるわけであります。ですから折にふ

れて何度でも頁をめぐつては深く／＼味ふことが大切だと思ひます。

今度私は我が校の愛する六年生のためにと思ひ立ち、酷暑と戦ひつゝ夏休の一部をさいて、おつと論語と首引きをしながら、少年にとつて、やさしくて爲になると思ふところに特に注意し、一章毎に意のあるところを汲んで、たつた一口何か言はせていたゞいたわけであります。勿論言ふべきことに限りのあらうはずはなく、随つて言ひ足りぬところも多々あるのですが、此のたつた一口が導火線となつて論語に親しみを感じ、進んで深く／＼研究して下さるやうになれば、私の望は十分に達せられたわけであります。

近頃色々の、善からぬ思想が、ちやうど眞夏の入道雲のやうに、むくり／＼と湧き起つて、清い少年の心を迷はさうといふ時に當り、少くとも健全と言はれる思想の中には、此の論語の中に流れてゐる大精神がとけこんでゐることを、先づ信じていたゞきたいと思ひます。

この信念は、どんなに皆さんの研究が進んでも根柢から裏切らるゝやうなことは決してあるまいと信じ、此の一書を皆さんに提供する次第であります。

かういふ意味に於て私は又此の書を一般に我が愛する小學上級生又は卒業生の讀物として提供したいと思ひます。

併し材料が材料だけに實は程度が少し高過ぎたかと思ひますが、甘つたるい書物や組し易い書物に親しむのみが必ずしも皆さんのためではないと思ひます。

尙この書物によつて漢文とは、どんなものかを大體知ることが出来ます。それは又皆さんにとつて、一つの悦びでなければなりません。

二、父兄その他の方々へ

初等教育を終らうといふ最も大切な時期に、教科書以外に一生を支配するやうな經典的の書物の誠に少いことを遺憾に思つてゐます。最初に頭に入つた一つの觀念が、人の一生を支配するといふことは珍らしくありません。ですから我々は子供の第一印

象・第一步を重んじなければならぬと思ひます。さういふ考に基いて何れ良書も現はれなければならぬと思つてゐますが、此の書物は、やがてその趣旨を體現させたいとの希望を千里の彼方に認めながら卒急に生れ出たものであります。何せ論語は、儒教の經典として數千年間、幾億の人を教導した尊い書物であり、我が伊藤仁齋などは「宇宙間第一の書」とまで激稱してゐる位のものですから、多少の異論は兎も角として此の書が我々の生命の糧として寄與するところの大なることは改めて言ふまでもありますまい。

しかし私の、こゝに書いたものは暑中の汗と共に流れ出たもの、無論大したこともありません。随つて随分御不満もあらうかと存じますが、本書の價値を原文に求めて之を教導の據り所とし、御愛児方のために精々活用して下さることを切に希望してをります。尙家庭ばかりではなく、初等教育關係者の方々にも十分活用していただけたら望外の幸であります。

因に各章毎に「お話」の部の末尾に書添へた歌は、原文と意味の相通ずるもので兒童の耳に入り易い卑近なものを選んでのせたのですが、中には原文に合ふやうに改作したり、又私が新しく作つて補つたものもあります。

尙卷頭に下手な目次を出しておきましたが、當らずと雖遠からずのものかと存じます。すべて、懇篤なる御教示に預ることが出来ましたら、身の仕合せばかりでは御座いません。

昭和十一年四月

著者識

例言

- 一、「第一章論語について」を読むことによつて、論語といふ書物しよぶつに關する大體の觀念だいたいぐわんねんが得えられませう。
- 二、「第二章孔子の人格じんかく」には、なるべく多く論語の中の章句しやうくを引用いんようしましたから、よく讀めば論語いづつわん一卷の眞精神しんせいしんがわかるでせう。
- 三、「第三章論語の内容」には、廣く世人の口の端はに上つてゐる章句をなるべく多くあげました。それに原文げんぶんがあげてありますから、直接論語ちやくろんごに親したしむために大切たいせつな章であります。十分に熟讀じゆくどく玩味わんみしていただきたいと思ひます。
- 四、第三章の「例話」は原文としつくり合ふものと苦心致ちしましたが、必ずしもさうとばかりは限りません。併し何等かの意味に於て原文と深い關係を持つてゐないものは一つもないはずであります。尙なほ、訓話くんわといふべきものが二三交つてをりま

す。

五、本書を編むに當り、先輩諸氏の著書數十種を参考に致しました。大體そのまゝ引用したところには書名を記して謝意を表すことゝ致しました。

六、先輩知友諸氏の御厚意は勿論、大同館主人坂本氏の少年讀物に對する理解と同情とに深く感謝しなければなりません。

七、想ふところあれば書き、書いては又想ふ。此の書の不備な點は、他日補ひたひと思ひます。

改訂版

非常時に際し

青少年諸子に呈す

想ふところあれば書き

書いては又想ふ

かうして、わたくしは

身の不備を補ひ、内容を充實させ

思想報國、精神報國を

期したく思ふ

(一)

論語は、是れ一言にして申せば、孔子の徳を立て道を明かにしたところの書物であるといふことが出来るでせう。ですから、先づ、道徳とは何ぞやとことを眞面目に考

へることは、論語を讀むもの、根本の心構でなければなりません。道德！ 道德！ 道德こそは、正に吾々の考究すべき重要事であります。

道德!! あゝ是れ千古の問題であり、謎であります。彼の子供達は、謎といふものに興味を感ずるものであります。そして進んで之を考へることを樂しみます。然も、道德の問題となると、子供も大人も深く考へることを好まぬといふ傾向は争はれない事實であります。

人々は常に利害といふことを申します。或は好惡の念に執はれて日を送つて居ります。せいぜい正邪といふやうな或一定の規則や習慣を尺度に、あつさり判斷して、事を簡單に片付け、時には自ら罪を作りながら、それと氣附かず、得々としてゐる向もあります。

さうして一步切込んで、道德の根本を考へ、何が眞の善なりや惡なりやと、日夜思ひ悩み且敢然立つだけの眞面目も忍耐も勇氣もない。随つて信念とか、道理とか、信

とか、愛とかによる言行はだん／＼少なくなつて來るばかりでなく、それに對する理解が出来ないといふ、之は實になさけない状態と言はねばなりません。

一體、利害や好惡の心といふものは、之は無論人間の本性であつて、人間ばかりか、殆どあらゆる生物は、兎角之に支配され易いのであります。「よい」の「わるい」のと、古往今來、人々の語るところを注意して御覽なさい。それが、案外、この利害好惡の心に根據を持つてゐるといふことは驚くべき事實だと申しても決して過言ではないでせう。(とはいへ、利用厚生を基調とする道德の重要性と、そのいざこざについては、他日稿を改めて申し上げ度く思ひます。)

道德といふものは、決して、かうした、人々の、單なる、利害心や好惡の心にのみ訴へるものではなく、もつと奥深い根本的の心情を動かして始めて成立つものであるといふことは、十分記憶されてよいと思ひます。

自ら信ずるところあれば千萬人と雖も吾れ往かんとする氣慨や、愛を感じては幾多

の犠牲を拂つても人の爲に盡すといふやうな心情は、利害好惡の心だけでは解釋出來ぬことであります。さればこそ、古來、聖賢や偉人や天才が總がかりで、このために苦勞もし奮闘もして居るのではありませんか。

併し、道徳心とか良心とかいふものは、彼の利害好惡の心とまるで別個の存在ではない。同じく人心の中に住してゐるものであつて、古人が此の道徳心の存在を發見した時には、天を仰いだ時と同じく、少なからず驚嘆したといふことであるが、さもあらうと思はれるのであります。

これを見ても、道徳心は、人心の奥に存在してゐることがわかります。いや、奥にも門口にも存在してゐるといふ方が適切かも知れません。

利害心は謂はゞ店員であり、玄關番の書生であります。來客といふとすぐ飛び出たがるのでありますが、道徳心は謂はゞ主人公であつて、やたらには、とび出さないにしても、話が少し面倒になると、主人公が出なければ解決がつかないと同じく、最

後には、所謂、義理人情で歩み寄るのであつて、道徳心は人間生活に於て重要な役割を演じて居るものであります。

併し氣輕な主人になると、すぐに玄關に姿を現はして應接すると同じく、道徳心も奥に引込んでばかり居らず、奥と門口とを往つたり來つたりしてゐる。道は須臾も離るべからざるものである。」と申しますが、全くその通りだと思ひます。書生や店員にしても、時に主人の重用を務めたり、やがては立派な主人になるであらうと思はれるやうに云爲行動してゐる向きも珍らしくないので、道徳心は如何なる人々にも如何なる場合にも附纏うて居るといつてよいかと思ひます。彼の孟子の四端説の如きは、之を言ひ當て、面白いではありませんか。之を見ても利害心と道徳心とは赤の他人ではないのであつて、全く家族の一員に過ぎないのであります。

利害心の動く中にも、たへず根本精神によつて統制されていくところに主人の存在してゐることがわかります。利害心を書生に見立てたからといつて、何も書生を馬鹿

にしてゐるのではない。「書生々々と馬鹿にはするな。大臣參議も皆書生。」といふ歌もある通り、苟も大志ある書生ならば、平生人に使はれて起居振舞に卑近なことをして居るやうでも、道德といふやうな根本の問題について主人以上に考究もし、實行もしてゐるに違ひないのであります。書生に貫祿がついてやがて主人となると同じく、書生も主人も根本に於ては、交渉のないものではなく、密接不離の關係を持つてゐるのであります。

吾々はたへず聖賢の書物や偉人の傳記に親しみ、磨きをかけてゐないと、主人は奥の方で晝寝ばかりして居て色々差支を生ずるに至るでせう、のみならず主人がそんな有様では、書生も自由に活潑に正常を得た活動は不可能となり、遂には浮かばれないことにならうと思ふのであります。

人格といふものは、此の利害好惡の心のみによつて動くものではなく、その奥に道德心といふものが儼然と控えて居てこそ成立つものであります。内容の豐潤にして雅

致に富むこと元より大切でありますが、之を統制し發揚するものは道德心を基調とする見識と信念とでなければなりません。

ですから、利害好惡の念にのみ左右されてゐるやうな淺薄なことでは、人格の最深所は到底窺ひ得るものではありません。若し玄關を覗いて書生だけだと早合點して馬鹿にしてかゝるものがあれば、それは物盗りや押賣りの徒といふべきであります。物の感じ方、考へ方、解釋の仕方の淺薄な人間が、往々、人物評を輕々しくして、人心を不安動搖に陥れ、社會の平和と幸福とを攪亂し、自繩自縛遂に一物をも得ざるのみか總べての物を失ふに至るなど、實にその道德心を解せざるの甚だしきものといふべきであります。

ところが、又、書生ばかりのさばつてゐて、主人が小さくなつて萎縮してゐるといふことであつたら、一家はめちやくととなつてしまひます。主人が澤山の書生や女中を使つて、大理想大抱負の下に、利用厚生を考へると同時に根本精神の暢達を計ると

いふことであつて、始めてその一家は、本筋に發展することでありませう。

道義心を以て利害心を驅使するところに、人生の妙味もあれば、人格の確立とか充實とかいふことも可能となるわけでありませう。

私は決して利害心を無視するものではありません。寧ろ人性に存する動物に近い情をも尊重し愛護することも大切であると思つてゐるものであります。併しそればかりでは困る。まるで書生ばかりで、主人の居らない家のやうで、さうした人格といふものは、頭の無い人間を見るやうなもので、實に殺風景も甚だしいと言はねばなりません。むしろ無頼の徒のやうに見える書生を統制し感化して、家の大用を爲さしむるだけの識見と度量とを主人に持たせたいと思ふものであります。

以上の見地より、私はこゝに、はつきりと明言しておきたい。少なくとも、

道徳といふものは、人性に存する利用厚生心に訴へるものであることも十分に承認致しますが、決して單に利害好惡の心のみ訴へるものではない。矢張り人間性に儼

存するところの仁義忠孝心に訴へて始めて成立つところのものであり、同じく、又、人間性の中に儼存するところの俠氣大行心を觸發することによつて始めて可能なものであると思ふのであります。(俠氣大行心については大いに考究を要する次第ですが、端的に申せば、偉人・國士・仁俠者・先覺・天才などの心境に屬すること、他日に譲る。) 翻へつて、世態を思ひ人情を察するに誠に憂慮に堪えざるものがあります。或者は魂の故郷を熱愛するかと思へば或者は亦名利の巷に奔走する。然も互に理解も思ひやりもない。之では世の中が圓く行くものではない。何とか互に歩み寄る方法は無いものであらうか。おのゝ自己の立場を固執して下らず、冷笑し、反目し、嫉視する、是れ現代の一大病患でなければなりません。今にして事物に對する感じ方、考へ方、解釋の仕方を正し深めるのでなければ、如何なる不祥事が次々と突發せぬとも限らぬでせう。

殊に時は正に非常時であります。常識のみでなく、非常認識を以てこの難航路を突

破せねばならぬと思ひます。思想精神を吟味し確立し洗煉し充實させることは刻下の急務と信じます。

若しこの少年論語讀本が、さうしたことに一層の役立をするならば、筆者の悦び之に過ぎません。

(二)

序を以て、もし申し述べさしていただきます。上述した、彼の、書生とか店員とかいふものは、玄關先、店先で仕事をしてゐるのだから、ごく卑近な末節に屬する利害好惡の心だけで動いて居ればよいかといふに決してさうではありません。それは他日主人となるべきものであります。苟も立派な主人たらんことを心掛けてゐる以上、その根本には道徳心の涵養を常に心掛けねばなりません。

平常は心も身も軽々と愛嬌よく小用を足して居ればよいのでありますが、やがて大用を足し得るだけの用意が是非共無ければならぬと思ひます。だから、時に、主人不

在の時などは、主人に代つて萬事立派にやつてのけられるくらゐに根本的な修養に努めねばなりません。

根を極めて風にまかす柳かな

この俳句のやうに、單に形式一片のものではないところの、あの深味もあれば血も涙もある道徳心を根幹とし、利害好惡心を枝葉と心得て、大膽卒直に世に處すれば、枝折れもなく、その人格は成長し伸展し、内容も十分充實させることが出来ることとせう。道義心がきびしく、良心が鋭くありながら、人あたりがわるく、圓滿な交渉が出来ないのは、人性の利害好惡の心を了解すること乏しく、それと道徳心との關聯に關し修練が足りないからであります。

併しながら、かどが立つからといつて、道徳心を曇らし之を磨礪することを怠るが如きことでは、根本相立たず、節操なき娼婦型の人間となるより外なく、眞に信賴することが出来ません。

まるくともひとかどあれや人ごころ

あまりまろきはころび易きに

と古人も歌つて居ります。

それ故、同じく圓滿と申しても色々であります。道義心を根底に持つての圓滿は實に立派なものであります。普通の圓滿は他人の利害好悪心を見抜くこと鋭敏で、かけひきよろしくやつてゐる向が多いのであります。之では圓滿居士もあてにはなりません。

よく人の氣をそらさぬやう、感情を重んずることがよいことであると言はれますが、その氣持とか感情とかいふものも、人によりいろ／＼で、普通の場合には、大抵他人の利害好悪心を重んずることに事實なるのであります。かうした事實を見ても利害好悪の心と道徳心との關係の淺くないといふことがわかるでせう。

併し、どこまでも利害は利害、好悪は好悪であり、正邪は正邪、善悪は善悪であり

ますから、是等を混同してはならぬと思ひます。大へん密接な關係はありますが、それ／＼独自の價値を持つてゐるものと思ひます。輕重本末を十分考へ一貫した精神を以て事に當らねばなりません。

それ故、各自その分を超ゆることなく、主人が居ない時は居ないやうに、家の中がおもしろくもあれば安心も出来るやうに、又、主人が居つても、餘り窮屈でなく、一同元氣に、和氣藹々の中に、各自その天分を伸ばすやうでありたいものです。

近時、世態人情を察するに、人格觀念は頗る淺薄となり、道徳の根本を究めようと努むること薄く、随つて人格的交渉などいふことは少なくなり、人々は商品價値のとりやりを基調として向背常なきまでに立至らうとしてゐます。

青少年諸子の悩みも恐らく世情のこの混濁せるに起因するものが多いことと思ひます。併し泥や土を氣にしてばかりゐたのでは思ふやうに歩行も出来ませんので、處世上の見識覺悟が十分無ければならぬと信じます。

社會が高潔であり、レベルが高いと、人々は小さくなつて、我が身を反省し、眞面目な修養を志し、どうかして社會の水準に自分を引上げようと努力します。然るに社會が泥海のやうであると、高潔の士には却つて人が寄りつかぬばかりでなく、けむつたがり、邪魔にし、手も足ももぎ取つて、その活動力を鈍らしてしまひます。随つて人も社會も低下するばかりです。ですから、

はちす葉の濁りに染まぬ心

を以て世に立つことは難しいことでもあります。けれども、それが出来ることでなければ強くは生きられません。又、人に親しむことも出来ません。

さて、然らば、泥海を乗切るのは單なる技術に屬することであつて、道徳の關知せざるところのものでありませうか。世の中が泥海のやうであれば、道とか徳とかいふことは考へないで所謂處世術といふものだけで進めばよいかといふに、それは誠にさもしい考であり、餘りに環境に左右されたところの、根本の甚だ薄弱な輕薄才子の

生き方だといはねばなりません。

少なくとも根本の確かな人であるならば、環境は如何にあらうとも、泥に汚されずに、毅然たるところは毅然と、高邁なところは高邁に、然かもたとへ泥がはねかへつたからといつても、いとも朗かに笑ひさぐめきながら元氣に世に處し、人を傷けたりせずに、ぐんぐん自己の人格を確立し、内容を充實させ、極めて自然なる状態に於て、人に對し又世に對し、よき働きかけをするであらうと信じます。

大空をかけゆく月し清ければ

雲かくせども光消なくに

是れ、實に、この種のすぐれた人物の姿を言ひあらはしたものではありませんか。

そんな理想的な人物が世の中にあるものか、といふ人もあるかなれど、現に、私は、青少年の中にさうした一人の生きた實例を持つてゐるのであります。彼の理想・心術は實に高遠にして明朗なるものであります。その根本精神は毅然たるものがあり、

然も虚々實々何等の屈托もなく、あらゆる人と心地よく應酬して行つたのでありました。ですから、彼は、個人として誠に充實した人となると共に、社會人として眞に圓滿な人として成長しつゝあつたのでありました。(その人今や亡く、一輪の花空しく名残を留むるのみ噫！)

此の愛惜すべき青年は、後に優れた師友と折衝して大いにその人格力量を涵養したとはいへ、嘗て我が少年論語讀本の愛讀者であり、熱心な支持者であつたことに想到し、有難くも勿體ないことであると思ふのであります。彼の人物行藏を知らば知るほど、私は、今更ながら、負うた子に道を教へられるやうな感じの切なるものがあります。未熟未完成の私ではありますが、冀くは人によつて言を棄てず、此の書を活用して下さるならば、不敏ながら、自己の役割使命を聊かなりと全うすることが出来る次第でありまして、感謝に堪へないところであります。(結)

昭和十一年二月梅薫る頃 先輩知友諸氏に感謝しつゝ、

著 者

少年論語讀本

目 次

第一章 論語について	一頁
一、書物の中の書物	一
二、論語に關する美談	六
三、論語の由來	一三
四、論語の篇と章	一五
五、論語の活用について	一八
六、本當の道德の爲に	二五

第二章 孔子の人格

- 一、英雄か聖賢か……………三四
- 二、崇高圓滿な人格……………三八
- 三、味ふべき點(其の一)……………四一
- 四、味ふべき點(其の二)……………五六
- 五、味ふべき點(其の三)……………七一
- 六、仰ぎ慕はる其の人格……………九二
- 七、少年諸子への希望……………九五
- 八、孔子略傳……………九九

第三章 論語の内容

一〇三

- 一、學問の光、人格の光……………一〇三
- 二、孝弟は、善行の本……………一〇八
- 三、お上手よりも真心……………一一五
- 四、我が身を省みよ……………一一八
- 五、しつかりした修養……………一二三
- 六、立派な人の生活ぶり……………一二八
- 七、貧者富者の戒……………一三三
- 八、志を立てよ、努力せよ……………一三八
- 九、父母の心配、病の用心……………一四四
- 十、馬鹿どころでは無い……………一五〇
- 十一、人の善し悪し……………一五四
- 十二、昔を考へ、今を知れ……………一五九

十三 よく読み、よく考へよ……………一六四

十四、知つたかぶりするな……………一六八

十五、人は心が第一……………一七四

十六、祭まつりを重おもんぜよ……………一七九

十七、善を爲すのに遠慮えんりよはいらぬ……………一八四

十八、使ふ人、使はれる人……………一八九

十九、道みちに迷まよふな、背そむくな……………一九七

二十、一日だけでも人間志願しがん……………二〇二

二十一、くよくよしない大きな志……………二〇六

二十二、人に怨うらまれるもと……………二一〇

二十三、利すを棄すて、義ぎをとれ……………二一五

二十四、他人は我が心の鏡かじみ……………二一八

二十五、言葉よりも實行……………二二三

二十六、徳あれば味方あり……………二二七

二十七、舊友きうゆうの出来るわけ……………二三二

二十八、考へること、行ふこと……………二三五

二十九、人の舊惡きうあくを思ふな……………二四〇

三十、自分の過あやまちは許すな……………二四五

三十一、貧乏して、も極樂淨土……………二四九

三十二、中味なかみとお飾かざり……………二五三

三十三、深い學問、正しい行……………二五八

三十四、眞の快樂、見かけの幸福……………二六二

三十五、強い自信力……………二六八

三十六、やさしくて強い人……………二七二

三十七、命あつての物種……………二七七

三十八、心は廣く、強く持て……………二八二

三十九、眞理を究めよ、身につけよ……………二八八

四十、天才よりも努力……………二九二

四十一、やむにやまれぬ志……………二九六

四十二、智者・仁者・勇者……………三〇〇

四十三、奥ゆかしい心持……………三〇九

四十四、衛生を重んぜよ……………三一三

四十五、起居振舞に氣をつけよ……………三一六

四十六、特長を發揮せよ……………三二一

四十七、死んで惜まれる人……………三二四

四十八、視聽言動を慎め……………三二九

四十九、國の治る本……………三三七

五十、正しくない人の命令……………三四五

五十一、仲よくせよ、雷同するな……………三四九

五十二、學問をする人の心色々……………三五五

五十三、實力を養へ……………三六〇

五十四、命と共に大事なもの……………三六四

五十五、考深い人、淺い人……………三六八

五十六、爲になる友、ならぬ友……………三七四

五十七、よい人柄には、よい考……………三七九

五十八、生れつきよりも習慣……………三八四

五十九、恭寛信敏慧……………三八八

六十、正直で強い世渡り……………三九四

六十一、よく學び、よく行へ……………四〇〇

六十二、天命を知れ、世間を知れ……………四〇七

少年論語讀本

古谷義徳著

第一章 論語について

一 書物の中の書物

「男の中の男」があるとしたら、「書物の中の書物」といふものも當然なければなりません。

若しも「男の中の男」とか「人の中の人」とかいふやうな頼もしい人が居ないとし

たら、此の世の中はどんなに淋しいことでありませう。同様に「書物の中の書物」といふやうな結構な味のある書物がないとしたら、我々はどうして此の心を慰め且勵ますことが出来ませう。

読んで味のある書物！ 読めば読む程味の出る書物！

それを探し求めねばなりません。

藏書家だ讀書家だと言つたところで、それがどれ程貴いといふのでせう。大して値打も無い書物を澤山持つてゐたからとて、又讀んだからとて、それがどれほど立派だといふのでせう。たとへよい書物だからと言つてもいゝ加減な上すべつた讀方をしたのでは是又仕方がありません。

我々は今や實に書物の多い時代に生まれ合はせてゐます。それだけに又書物の撰擇と讀書の方法に就て心を潜めて見なければなりません。つまりぬ書物をあさりまはつて貴重な時間を空費した上に、我と我が心を損ふとしたら何とおろかしいことではあ

りませんか。

西洋の諺に

「一書の人を恐れよ。」

といふのがあります。是はいふまでもなく、一つの立派な書物を専心精讀し玩味するところの人は、非常に力強いしつかりしたところがありますから、なか／＼馬鹿には出来ない（どんな場合にでも馬鹿にしてよいわけはありませんが！）つまり、さういふ人は恐れ敬はなければならぬといふやうな意味を述べたものでありませう。

實際此の頃のやうに色々の書物が後から後からと現はれてまゐりますと、あれも之もと目移りがして、たゞ／＼せはしく讀みあさるばかりで、讀んだ後はたゞ茫然として、どれ程血や肉になつたかと、疑はれるほどであります。徒に多く讀むといふことよりは、精しく／＼と心掛けることが今の時代に於て殊に必要ではありませんまいか。それには又實のあるよい書物を探し求めることができます／＼必要でありませう。

探した結果、さうした書物が少なくて失望するかも知れません。しかし是非とも其れを探し求めなければならぬと思ひます。

かうした要求に基いて、まづ擧げねばならぬのは論語でなければなりません。しかし論語はなかくむづかしい書物であります。大人の人でも論語にある言葉を本當に體驗して心から納得するまでには相當の時日を要することと思ひます。まして少年にとつては尙更むづかしいことでありませう。

しかしむづかしいからと言つてよい書物を棄てては、よい人にはなれません。

まづ論語がよい書物であることを信じて、よくわかるまで讀み且味はなければなりません。國學者として有名な本居宣長の高弟であつた藤井高尚といふ人が或時論語についてかういはれたさうです。

「支那の書物が澤山ある中に、獨り他から傑出して、人の言葉ではとてもほめきれないほど立派な書物がある。それは言ふまでもなく論語である。何ぜかと言へば此の

書物は圓滿な人格と完全な智能とを具へた孔子の行と弟子に教へた言葉とを記した書物だからである。(弟子の言行もある)人の行ふべき道を細に教へ諭したところは天地の中に他に比類を見ることが出来ない。一體善い事と悪い事とは大體見分けが附くけれども、其の中の輕重を考へて時に適つた行をすることは難かしいことである。そこを残るところなく明かに教へ諭してゐるのが論語である。自分はまだ年の少い頃から、己の修養のために、此の書物を時々讀んだが、讀む毎に成程と感じてどうか此の書物にあるやうにしたいと思つて、永く心掛けたから、愚かな身でなく、思ひ通りにはならないながらも、身のためになつたことが多かつた。己の爲になつた書物だから、人の爲にもなるやうにと思つて、外國の書物ではあるけれども、修養のため是非一讀することを勧める。」

論語がどれほど尊い書物であり、書物の中の書物」ともいふべきよい書物であるか

は、此の一言によつてもよくわかるではありませんか。

大人は大人相當に子供は子供相當に之を熟讀玩味しなければなりません。

二 論語に關する美談

論語が昔からどれほど多くの人々によつて愛讀されたか、又我々の生活を導くために、どんなに役立つたかといふことを知るために、私は論語に關する逸話を少しばかり次に掲げることと致しませう。

○ 昔支那の宋といふ國に趙普といふ人がありました。宋の國を開いた太祖といふ皇帝に仕へて、大の勳功を立てた一大偉人でありました。

趙普は最初役人として事務を取行ふことが上手だといふ評判が高かつたのですが、

學問の素養は至つて少かつたものですから、或時皇帝は「立派な人物だが惜しいことに學問が無い」と言つて、普に讀書の必要を勧められました。

人生意氣に感ずとか、日頃敬愛してゐる皇帝の此の一言に、普は深く感激し、それからといふものは明け暮れ殆ど書物を手から離したことが無いといふ有様でした。そして朝廷に何か重大な會議でもあると、その前には何時も自分の居間の戸をピツタリと締めて、一つの篋の中から書物を取り出し、熱心に之を見るといふ風でありました。しかし當時其の書物が何であつたかは誰にもわかりませんでした。ところが普が死んでから家人が其の篋をあけて見たら、其の中には意外にも論語が入つてゐました。そこで始めて趙普は、ふだんに論語を愛讀し、之によつて天下の政治をお佐けてゐたのだといふことがわかつたのであります。

尤も趙普は、第二代の太宗皇帝にかういふ事を申し上げたことがありました。「私是一部の論語を所有して居りますが、其の半部を太祖皇帝をお佐けて天下を

定め、他の半部で陛下をお佐けて世の中を太平に致しました」と。

僅かに論語一部ですが、之を精讀し玩味して、實行に現はせば、千萬の雜書を讀むよりは、いくら爲になるかわからぬことでありませう。

太宗の次に眞宗が位に即きました。其の宰相となつた人の中に李沆といふ人がありましたが、名の通り利口な人で、これ亦大そう論語を讀むことが好きでありました。或時

「自分は宰相となつてからでも、論語の中に「用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てす。」といふ句があるが、此の兩句ばかりは、なか／＼實行が出来ないといふ感じがする。聖人の言葉といふものは實に深味のあるものだ。死ぬまで能く讀み、能く味つて見なければならぬ。」と言つたといふことであります。

之は、つまり「知るは易く、行ふは難し。」といふ感じを述べたものでありませう。我が國では、片鎌槍で有名な加藤清正が論語の愛讀者でありました。

或時、清正は自分の領國の肥後の熊本へ船で歸つたことがありました。ちやうど我々が電車の中で本を讀むやうに、清正も船の中で論語を開いて讀み始めました。そして感じたところは朱筆を把つて、しきりに線を引きたり、印をつけたりしてゐます。すると、其の側には、清正が日頃子供のやうに可愛がつてゐたお猿が居つて、不思議さうに眼をクリ／＼させながら、清正のお顔と書物とを等分に眺めてゐるのでした。やがて清正が小用で一寸座を離れますと、お猿は忽ち朱筆を持つて、もうすつかり清正氣取りになつて、其の大切な御本を眞赤にしてしまひました。

清正が何氣なく歸つて見ると此の有様。清正は太い眉氣をピク／＼させながらも、怒るにも怒れず、

「ウフ、えらいことをやつたな。」

と微笑しながら、

「こりやお猿、お前も孔子の道を學ばうと言ふのか。わツハ、ハ、ハ、感心な奴ぢや」

言ひも果てぬに、もう清正の眼は再び論語に注がれ、手には朱筆が持たれてゐるのでした。

これでお猿もほつとしたでせう。そして叱られなかつたことを、どんなに嬉しく思つたこととせう。

秀吉の死後、豊臣家の大黒柱は、實に此の清正でありました。流石の徳川家康も、清正の至誠ばかりは無視するわけにはまゐりませんでした。

心と言葉。清正の精神と論語の言葉。此の二つを、よく照合せて見る時、其處に無限の興味を感じる事が出来るではありませんか。

「良書と良友に親しめ、そして甲斐ある一生を送れ」と私は叫ばざるを得ません。論語に關する逸話を探したらまだく數限りなくあること、思ひますが、後は皆さんにお任せすることにして、尙一二附加へておきませう。

近世和歌の大家、香川景樹に向つて或人が、

「巧に和歌を作るには、どうしたらよいものか。」

と尋ねました。すると景樹は、

「歌を詠じ、佳い句が浮かばなければ、論語を読むがよい。」

歌詠でありながら、やつぱり論語をよんで、品性の修養を心掛けられたのであります。つまり歌に限らず人間萬事、品性が本であることを現はしたよい話ではありませんか。精神を養ふにはどうしても論語のやうな書物に親しむことが大切だと思ひます。

最後に桂田氏の「趣味の偉人物語」といふ書物の中にあけてある。岡山藩主の話とそのまゝ掲げておきませう。

岡山藩主、新太郎少將は名君の譽高かつた人であります。その小さい時、晩、床の中に入つても、少しも睡らうとはしません。夜明け頃になつて、僅かに眠ることが長

い間つゞきました。お側の家來達が、

「どうしてでございますか。お體でもお悪いのでは御座いせんか。」

と、おきゝしましても、はつきりとは話しませんでした。ところが或晩さも心地よさ
さうに朝まで眠りました。家來が又そのわけをききますと、彼は、

「私わたくしは先祖せんぞのおかげで、大國たいこくの主人しゅじんとなつたが、私わたくしはどうして此この領民達りやうみんたちを治め
て行けばよいかと、いろく〜と心配しんぱいしてそれで寢ねられなかつたのであるが、昨日きのふ論語ろんご
を讀んで、思おもひついたことは、私わたくしも孔子こうしの教をによつて、領民りやうみんを教をへ導みちびくことが、一
番大切ばんたいせつであると考かんがへた。それに安心あんしんが出来て、昨夜ゆうべはよくねられた。」
と話はなしたといふことです。

以上論語いじやうろんごに就つての美談びだんを數々かずかずあげましたが、是これに依よつて見みても、論語ろんごが私達わたくしたちの修身しやうしん
處世上じよせいじやうい如何いかに貴たふとい書物しよぶつであるかが、おわかりになつたことと思おもひます。

「論語讀ろんごまずの論語知ろんごらず。」は仕方しかたがないとしても、折角せつかく論語ろんごを讀よむからには「論語ろんご
讀よみの論語知ろんごらず。」にだけはならぬやうにしたいものです。世よには「論語讀ろんごまずの論
語知ろんごり。」といふやうな賢人けんじんも少すくくないと思おもひますが、論語ろんごを讀よんで論語ろんごを知しらなかつ
たら、是等これらの人々ひとびとに對たいして何なんと面目めんもくが無ないではありせんか。

三 論語の由來

論語ろんごは一口ひとくちに言いふと孔子こうしの言行錄げんかうろくであるといふことが出來ます。けれどもそれは大
體たいのことで詳くはしく言いふと、其その門人達もんじんたちの自みら述のべた言葉ことばも交まじつてゐます。

たとへ門人もんじんの言葉ことばだと言いつても、その源みなもとは皆孔子こうしの思想しやうと人格じんかくに基もとづいてゐるので
すから、論語ろんごを讀よめば孔子こうしの思想精神しやうせいしんはよくわかるわけであります。

つまり論語ろんごといふ書物しよぶつは、孔子こうしがその門人もんじん及びその當時たうじの人ひとに應答おうたふした言葉ことばや相共あひとも
に談論だんろんしたことや門人達もんじんたちが親したしく見聞けんぶんした孔子こうしの言葉ことばや行狀ぎやうじやうや容貌ようぼうや態度等たいどとうを各自かくじに

筆記しておいたもの等を、孔子が亡くなつてから相集つて、論撰して一つの書物としたものださうです。そのやうに色々の語を論撰したところから、此の書物を論語といふのだと申します。論語は、もと單に論といひ、傳と言つて、支那の西漢時代には、古論、齊論、魯論といふ風に三種ありましたが、それを西漢の末に、張禹といふ人が齊論中の二篇を削り、魯論と合せて今の論語二十篇としたとも言はれてゐます。

論語の作者は孔子の門人だといひますが、門人と言つたからとて孔子の直弟子だといふわけではありません。現に朱子といふ人は「有子曾子の門人である」と主張してゐます。して見れば孔子の門人のその又門人達の手によつて編まれたものであることがわかりませう。是が又比較的穩當な説だと言はれてゐます。

其の後凡そ二千五百年の間、孔子の徳化が著しかつたやうに、論語は普く後人の敬重するところとなつてゐます。

此の尊い論語が我が國に傳つたのは第十五代應神天皇の十五年、即ち今から凡そ千

七百年も前のことです。その後、論語は我が國の上下に重んぜられるやうになり、徳川時代になつてからは、第一に五代將軍綱吉が漢學に熱心で、病中でも書物を手放さなかつたといふ有様、四書五經などの書物を出版させるやら、孔子の廟を江戸の湯島に建てるやらして、尙その上自分からも講義をするほどでしたから當時論語がどんなに尊重されたか改めて言ふまでもありますまい。次であらゆる學者によつて盛に研究され唱道されましたからその尊い教訓は一般に普及され、我が國民の精神を養成したことは決して少くなかつたと申します。

さうして「論語讀みの論語知らず」などと言つて、論語を讀まぬことは勿論之を知らぬことを大そう恥ぢるといふ風でありました。

四 論語の篇と章

論語は全部で左の二十篇から成立つてゐます。

學而	爲政	八佾	里仁	公治長	雍也	述而	泰伯	子罕	鄉黨	先進	顔淵
子路	憲問	衛靈公	季氏	陽貨	微子	子張	堯日				

これらの篇名は、各篇の首章の頭の文字二つ又は三つを取つてつけたもので別段意味があるわけではありません。例へば「學而」といふのは、第一篇の始にある「學而時習之亦不說乎……」といふ章の頭の二字を取つてつけたものであります。因に學習院の名は實に此の章の中にある「學」と「習」との二字を取つたものだと言はれてゐます。

要するに篇名は機械的につけたものでありますから必ずしも、其の篇の内容をあらはしては居りません。

しかし大體から言ふと、學而第一は主として學問のことを言ひ、公治長第五は古今の人物を論じ、鄉黨第十は孔子の行狀を記し、先進第十一は多くの弟子のことを記し

微子第十八は衰世の理を論じ、子張第十九は門人等のことを述べてゐるやうにも見えますが、元々、一定の標準に基いて系統的に分類したものではありませんから一概に言ふことは出来ません。

それは兎も角、學而から鄉黨までの十篇を上論語と言ひ先進から堯日までの十篇を下論語といふやうに大きく分ける仕方もあります。そして上論語の初めに學問のことを力説し、下論語の初めに禮樂のことを述べてゐるのは大いに味のあるところでありませう。孔子の教に於て、學問と禮樂とをどんなに重んじたかゞそれでもわかることと思ひます。

「終身齊家治國平天下」

と云ひ、

「修己治人」

といひ、孔子の教の目標としてゐるところでありませうが、此の理想を十分に實現さ

せるものは、學問禮樂でなければなりません。
 さう考へて來る時に、論語の篇の組立方も全然無意味のものだとは言はれません。
 さて其の各篇には、それ／＼少いのは三章、多いのは四十七章も擧げてあります。
 章と言つても大抵は、ごく短く、僅かに一二行しか無いやうなものが非常に多い。言
 葉こそ短いが「寸鐵人を殺す」といつたやうに、其の意味は深くもあれば又鋭いとこ
 ろもあります。各章の精神を殺すも活かすも、實に之を讀む人の心の働きによるとい
 ふことを思はなければなりません。

五、論語の活用について

論語を讀んでも之を活用することを知らなかつたら仕方ありません。殊に論語は
 道德の書物でありますから、之を讀んで少しづつでも善い行が出来るといふのでな
 ければ此の書物の本來の性質に反するわけでありませぬ。

「道は近きにある」と申します通り、論語に示されてあることは高尚であるけれども亦何人にも實行の出
 來る大そう卑近なことであります。

論語を實地に應用し活用して行かうと心掛けてゐる人は、古今に亘り決して少くな
 いのでありますが、論語の尊重者として知られてゐる實業家澁澤榮一氏は、或時次の
 やうに言はれてゐます。

「論語は決してむづかしい學理ではない。學者でなければ解らぬといふやうなもので
 はない。論語の教は廣く實用に効能のあるもので、元來解り易いものを學者がわざ
 とむづかしくして農工商等のあづかり知るべきものでないといふやうにしてしまつ
 た。これは大なる間違である。このやうな學者は譬へばやかましい玄關番のやうな
 もので、孔子には邪魔ものである。こんな玄關番に頼んでは、孔子に面會すること

は出来ぬ。孔子は決してむづかし屋ではなく、案外さばけた方で、商人でも農夫でも、誰にでも面會して教へてくれる方で、孔子の教は實用的の教である。」

論語が此のやうな性質のものである以上、我々は日常卑近な生活に於て論語が如何に活用されてゆくべきかを考へて見る事が大切でありませう。

さていよく實行といふことになれば何よりもまづ「程よく」といふことを念頭に
おかねばなりません。

尋常小學讀本卷十二に

「孔子常に中正不偏を貴び、中庸は徳の至れるものなり。」といひ、「過ぎたるは及ばざるが如し。」ともいへり。

とも言つてあるやうに、これが孔子及び孔子教の本領であり又論語を一貫した精神であります。それはつまり「程よく」やるといふことに外ならないと思ひます。

昔ギリシヤの哲人が

「勇氣とは亂暴と臆病との中程である」

「儉約とは贅澤と吝嗇との中程である」

といふやうなことを言つてゐるのも又伊達政宗が

「仁に過ぐれば弱くなる」

「禮に過ぐれば諂となる」

等と言つてゐるのも、皆此の中庸といふことの大切なことを示した言葉ではありませんか。偉い人々の考はさすがに勝れてゐると思ひます。

例へば孔子が非常に重んじたところの仁といふ徳にしても、餘り過ぎては立派に之を實行することは出来ません。仁とは一口に言つたら眞面目で思ひやりが深いことではありません。誠に結構な徳には違ひありませんが、これとても餘り極端になり、度を過しますとよい物笑ひの種となつてしまひます。

昔支那の春秋の時代の宋の國に襄公茲父といふ王がありました。或時楚の國と戦つたが味方のものが「敵が陣を張らないうちに撃破りませう。」と申しますと、襄公は「立派な人といふものは、人のこまつてゐるところにつけこんで之を苦しめるものではない。」と大そう立派なことを言つて反對しました。そのため宋は遂に楚のためにさんく撃破られてしまつたと申します。之を「宋襄の仁」と言つて世間の人が笑ふのですが、仁は仁でも之は大そう氣の毒な仁ではありませんか。(つまり仁)

良心が鋭敏で立派な人でありながら、よく失敗したり嘲笑されたりしてゐる氣の毒な人があります。これは多く「中庸」を認めることが出來ず「程よい」實行が出來ないためでありませう。(つまり立派)

善と惡とは實に隣合せになつてゐます。一步の踏み方如何によつて善ともなれば惡ともなる。道徳の形にとらはれず、その眞精神を發揮するやうに心掛けたいものであります。次に澁澤氏が實行上の心得として掲げられた「處世十訓」の項目を擧げて見

ませう。(活論語)

- 一、仁恕と柔愚
- 二、禮讓と諂諛
- 三、智と狡猾
- 四、從順と卑屈
- 五、節儉と吝嗇
- 六、自由と放縱
- 七、卒直と傲慢
- 八、勇敢と狂暴
- 九、自信と執擁
- 十、質實と粗野

以上二つづつ相對照させてある中で、上の方は誠に美しい徳であります。下の方は

何れも皆排斥すべき不徳であります。心の手綱の取り方如何によつて美德の人ともなれば不徳の人ともなる。すべて立派な理想を心に描くは勿論、實際に當つては判断を誤らず過不及のないやうにと心掛けたいものであります。

總べて實行に際しては、時と場合によつて特殊の事情といふものを考へて見なければなりません。

例へば學生は學生として時と場合に應じて適當に振舞ひ、日本人は日本人として時と場合を見て程よく振舞ふ。そこに善があり道徳があります。

菅原道眞が「和魂漢才」と言はれたのも亦、山崎闇齋が孔孟の教を尊重しながらも「若し萬一我が國を犯すものがあらば、孔子だらうが孟子だらうが、劔を執つて之を撃たう」と言はれたのも、日本人としての大きな自覺の上に立つて論語を活用しようといふ精神に外ならないと思ひます。

我と我が心を働かせることをしなかつたら、切角よい書物を讀んでも何のたしにもならないでせう。

自分自身の頭によつて又行によつて、善を創造する者(産み出)道徳を實行するもの、其の人達こそ論語の活用者でなければなりません。

六、本當の道徳の爲に(むづかしければわか)るまで讀んで下さい

道徳を口にする。それは我々の力めて避けたいところでもあります。何ぜなら道徳的であることの幸福は、之を口にするの不幸に勝る萬々であるからです。とは言ふものゝ一見道徳的と見えるところの人は案外、道徳を問題とせぬものであります。その社會的に又道徳的に恵まれた性情は、改めて道徳を問題とするの必要を認めず且は一身を守るに急なるがためではないかと往々疑はれます。かういふ人々から、我々は強ひて道徳のことを聴きたいとは思ひません。

私は寧ろ切實に道徳を問題とし、一身を擧げて道に悩んだ人々の體驗を尊び、そこに眞の道徳、生命の道徳を發見し獲得して行きたいと思ひます。

一體道徳家ぶつたり、道徳家として祭り上げられたりすることはよい感じのするものではありますまい。併しながら、どんなに放縱な人でも、我が子の前途を思ふ時は、必ず道徳を考へたり口にしたたりすることと思ひます。それがやがて親の慈悲といふものでせう。此の見地から私は敢て筆を把ることが出来ました。

私は所謂道徳に盲従することを嫌ひます。同時に、又徒に反抗することを好みません。私は飽くまでも道徳の本體に肉迫させていたゞきたいものであります。それがために私は、日々の經驗を重んじ、そして人間と社會、自然と人事の一切を、じつと見つめねばならぬと思つてゐます。

電車に乗つても、道を歩いて、乃至は食事の際にも、道徳のために考へさせられる事項は數限りなく我々の前に展開されて來るのであります。それを擱むことを忘れてはならないと思ひます。

古來「論語讀みの論語知らず」といふ言葉は、最も我々に親み深いものゝ一つであります。道を説いた論語に關して、此の言葉の存在することは誠に、ふさはしいことだと思ひます。

若し論語一卷の讀方と語義と内容の一通りがわかつたからと言つて、論語を讀んだなどと豪語するものがありましたら、聲をひそめ其の袖を引いてお互に誠め合はなければなりません。我々は論語に限らず總べて古來の聖賢哲人の體驗から生まれた言葉の、解つた上にも解るやうにと、自己自身の生活を重んじ、精進したいと思ひます。

此の書の「お話」の部は、論語に關する一般普通の觀念を背景とし尙僅かに原文が少年の耳に入る程度で筆を把つたに過ぎません。私として概念化を恐れぬわけではありませぬ。しかしながら、

「直観なき概念は空虚なり。概念無き直観は盲目なり。」
とも申します。

「まことの言葉を味ふことの出来るよろこび」と「味のある言葉を吐くことの出来るよろこび」とは、結局、同じでは無いかと思はれます。分け上る麓の道は異なつてもどうか、行くところに行きたいものです。何にしても、人格は光と熱とを持つて來ねば所詮駄目だと思ひます。

光ばかりの人格、それは、あんまり淋しいではありませんか。

熱ばかりの人格、それは、又、あんまり目が無さ過ぎるではありませんか。

思想と實行、此の二つの鍵を忘れては人生への入門は覺束無きことでもあります。

さあ之で私共の立場も少し、わかりかけたやうな氣が致します。

此の書が、淋しくも道を説かうとしたものでないことは言ふまでもありません。寧ろ此の書は人間の内から、にじむ生々しい血と涙と膏とを如何にして涵養し育成し善

導すべきかの苦惱と希望とを深く秘めて、目前の必要から突如として生まれ出たものであります。

それ故、若し此の書の長所にせよ短所にせよ、それを鮮かに突き止めようとする方は眞の道徳の理解者であり此の書の活用者でなければなりません。

さういふ方々には進んでお話を伺ひたいと思ひます。

○
尙、私は道徳及び道徳家に就て少しく書いて見たいと思ひます。

彼の本當の道徳に精進しようとする者は勿論、我々の理想的要求に反した寧ろ其の妨げとなる似て非なる道徳に對して憤慨する者、及び本當の道徳を生み出すために眞に煩悶する者、是等を私は道徳家と呼びたいのであります。

其等の人々は實に人類の尊い使命に關係ある人達だと思ひます。

どうぞ道徳のために精進して下さい。憤慨して下さい。煩悶して下さい。要するに道

徳を問題として下さいと願ふものであります。今度私が此のやうなものを書いたのも道德のために精進し憤慨し煩悶し、然かも難關を切りぬけて一路の光明を認めていたゞきたいために外なりません。

すべて、道德的な書物を熱心に讀んでいたゞきたいと思ひます。そしてそれに對して共鳴し憤慨し、煩悶する、何れも皆結構であります。どうか其の何れかの態度に出して下さい。たゞそれだけではありません。之を問題として眞劍に考へ且行ふといふことを希望して止みません。そこから、やがて生命の道德は現はれて來ることでありませう。それ故此の書は無論金科玉條として提供したものではありません。言ふまでも道德を問題としていたゞくためのよすがにもと提供したわけでありませう。少くとも時代思潮の眞相を解し、人類永遠の理想を知る限りに於て、私の此の小書が無意義に終ることは斷じてあるまいと信ずるものであります。

言ふまでも無く道德に對する誤つた狭い考といふものは、不道德と同じく恐ろしいことだと思ひます。それは人間を小さく縮め、此の世を煩はしくするより外に何の益するところもないからです。だから最初にも述べました通り、人は道德を口にしないで、眞の道德に觸れて行かうとする態度の中に幸福が閃くものだといふことを思はなければなりません。

何と言つても我々にとつて總べて命が本であります。命の泉が涸れてそこに道德的な訓言が澤山に攻めよせたら、とてもたまつたものではありません。今死なうといふ時に良心が頻りに「悪かつた。く。」と攻めつけても、もはやどうにも仕様がありません。病人は死を早めるばかりであります。ですから良心といふものは丈夫な時に活躍させねば駄目だと思ひます。達者な時に道德を行はないで何時行はふといふのでせう。肉體的にもせよ、精神的にもせよ、我々は各自その生命を生々させねばなりません。そして生命を培ふためにあらゆる道德的訓言が役立つてこなければなりません。どこまでも、生命のための道德であり、道德のための生命ではないといふことを忘れ

てはならぬと思ひます。だから私は「道德だからおやりなさい」などと言つて人に強ひたくもないし又自分としても、それだけではとても満足が出来ません。

何か知らぬが「止むに止まれぬ心」から眞直に一心不亂にやつて行く、それが同時に大へんな道德であるといふのが好きである。それから又人が一心不亂に何かやり出したが脱線しないやうにと忠告した、それが又非常な道德であるといふやうなのが望ましい。

内に本能的な生命が動いて、それが理想的に導かれて行くだけでも申しませうか。兎に角、理想的に本能的に生命が動く、そこに本當の道德が伏在してゐることだけは確かだと思ひます。それを飽くまで闡明していくことは、實に人類共同の責任でなければなりません。少年だからといつて

「本當の善とは如何なるものであるか？」

如何にして善を行ひ、眞人間となるべきか？

といふやうなことを全然考へもせず、行ひもしなかつたら、その結果はどうでせう。

我々は論語を讀み孔子にあやかつて、人間的に、そして社會的に本當の善をしつかつつきとめようではありませんか。

次には章を改めて孔子の人格を味ふことに致しませう。

第二章 孔子の人格

一 英雄か聖賢か

英雄には英雄の面白いところがあり、豪傑には豪傑の味があります。しかし嘗ては華々しかつたそれ等英雄豪傑の生涯も、今はもう我々の生活とは大分かけ離れたものとなりつゝあるやうに思はれます。

之に反して、獨り聖人の廣大無邊な徳澤ばかりは、其の人去つて幾千年、星移り、月變るにつれて、益々其の光を放つの感があります。

ところが皆さんの中には、

「聖人なんかつまらない、英雄の方がよつほど面白いや。」
とあつしやる方もあるでせう。

さうです／＼その通り事實面白くもあれば又痛快でもありません。

しかし靜かに考へなほして見て下さい。

皆さんの好きだといふあの英雄も時には名も無い戦を起してずるぶん人殺をしたり、罪もない人々を苦しめたりしたではありませんか。それから又我々の祖先がまじめに熱心に築き上げた文化を臺なしに破壊したではありませんか。

英雄や豪傑は活動や芝居で見ると、ほんたうに痛快な人達でありませう。けれども實際人類の發達や幸福の爲に、そんなに感謝すべき人達ばかりではありませんよ。勿論理想や精神の氣高い又時勢が要求した本當に感謝すべき立派な英雄も澤山あるにはありますが、概して彼等は自己中心で自分勝手が強過ぎたやうに思はれます。野心や功名心かられて、本當に人類の將來を考へてくれなかつたやうな傾向が著しかつたやうに感ぜられます。

世の中が亂れてゐるといふやうな場合には、時に英雄豪傑の荒療治も必要でありま

せう。

けれども英雄豪傑を必要とする時は、特にまだ人間が野蠻の域を脱してゐない時だと言はなければなりません。

わからずやの慾の深い無趣味な、をぢさん達の活劇を何時まで喜んで見てゐる積りでせう。もう大抵にして眼を覺さなければなりません。

電話・電燈の發明は勿論、心の扉を開いてくれたり、我々の胸を大きくひろげて下さるをぢさん達を、もつとく歓迎しなければならぬと思ひます。

人類には色々の尊いお仕事如山と積まれてゐるのであります。

なぐつたり、ひつかき廻したり、にらめっこやいたちごっこをしてゐる程なさけ無
いことはありません。併し今すぐに私達の望むやうなわけにはいかぬでせう。それ
だから正義人道の爲に闘ふ英雄豪傑は、まだくなく必要であります。楠木正成
や乃木大將のやうな偉い人達でしたら何時でも歓迎しなければなりません。野蠻な無

法な相手の無くならない限りは……。

四方の海 皆はらからと思ふ世に

など波風の立ちさわぐらん。

畏くも明治天皇の此の御製の大御心を汲むことの出来ない限りは……。

此の意味に於て私は英雄豪傑を排斥するものではありません。否大いに其の傳記
を研究することを皆さんにお勧めするものであります。聖賢の心を心とする英雄豪
傑、強い人！ 西郷・乃木 それは恐らく社會が不斷に要求する人達でありませ

う。兎も角、正義人道に立脚する限り、其の使命は實に貴いものだと思ひます。

しかし私は今、人類永遠の理想のために、しばらく眼をとちて、やゝ嚴肅な氣持
で、大聖孔子の面影を偲びつゝ筆をすゝめていくことと致しませう。

それはどういふ方面に向ふ人にとつても、大切な心の準備だと思ひますから……。

一 崇高圓滿な人格

世界に山は多いが、富士のやうな秀麗な山は少い。此の世に人は多いが、孔子のやうな偉大な人は誠に少いのであります。

其の人格は八面玲瓏といふ風で、どんな人がどんな方面から見ても、少しも間然するところが無いと言ひたいほどであります。

其の圓滿にして崇高な人格は、凡人の味方でもあれば、又非凡人の味方でもある。つまり、人類一般が頼みと仰ぐところの有力有徳な人であつたのです。

此のやうに萬人の心を得るといふことは人として最もむづかしいことでありませう。蓼食ふ虫もすきくといふやうなわけで、自分と同じやうなタイプの人でなければ、理解が出来ぬとか、同情が持てぬとかいふのが、世間の人の陥り易い弊であります。

す。

然るに賢愚強弱の差別なく、よく人を知り、その上に極まらない愛を以て接したところ、そこが實に孔子の偉大なところであり、又天下後世に其の名を成した所以だと思ひます。

しかも此のやうな聰明と美德とは、決して先天的に備つて居つたといふわけではなく、
「生れながらにして知るものにあらず」
とか。

「下學して上達す」(下を學んで上に達すること、人)
とか孔子自ら言はるゝ通り、それこそ尋常一様でない努力と修養の結果遂に完成され

たものでありますから、何となく、
「勉強家のをぢさんだなあ」

「えらいをぢさんだなあ」

といふ感じがする。

そこに人間としての親しみが起つて來るわけでありませう。

キリストや釋迦の生涯は餘程人間離れのしたところがありますが、之に較べて孔子は遙かに人間味に富んでゐると思ひます。

「空腹に飯」と申しますが、なんと云つても米は百味の長であります。

若しもお腹がすいたら御飯を食べるのが一番である。ちやうどそのやうに我々の心が飢たやうな場合には、孔子の思想と行状とに照らして篤と反省して見ることが肝要だと思ひます。そこに魂の安住境・清涼劑を見出すことが出來ませう。

しかも、めい／＼の人格が向上進歩するにつれて更に偉大な孔子が眼前にあらはれて、我々を導くことでありませう。

見る人の心々にまかせおきて

高嶺に澄める秋の夜の月

孔子の偉大な人格を一度に見究めようとしても、それは餘りに無謀のことかと思はれます。むしろ我々は一步より一步と脚を踏み出すことによつて更に偉大な孔子の人格を味はつていくことを楽しみとせねばなりません。

三 味ふべき點（其の一）

さて孔子の人格について味ふべき點は多々ありませうが先づ次の三方面から味つて見たいと思ひます。

第一に孔子は大へんに學問好きで物事に熱心な人でありました。

論語の開卷第一に

「學んで時に習ふ、亦よろこばしからずや」と述べてあります通り、孔子の求知好學

の念は常に火と燃えてをつたのであります。それ故若し學習上わからぬ點があれば何人にも聞きただして徹底するまでやらなければ止めぬといふ風でありました。

もと／＼大そう謙遜な人でありましたが學問にかけては非常に猛烈な人であつて、何人にも譲らぬといふ自信を持つて居りました。

或時などは、

「十室の邑（小さな村）必ず忠信、丘（孔子の名）の如き者あらん。丘の學を好むに如かざるなり。」（公冶長第五）

と言つて非常な意氣込を示してゐる位で讀書研究には全く日も足らぬといふ有様でした。かうして萬卷の書物を読み盡し、更に晩年には、むづかしい易といふ哲學的の深遠な書物を熱心に研究しましたが、本の綴目が三度も切れたといふことです。しかもそれは丈夫な韋で出来てゐたといふではありませんか。粗末に亂暴に取扱つて切れたのなら、ちつとも感心は出来ませんが、孔子は其の取扱ひ方が人一倍丁寧であつた

にも拘らず熱心研究の結果自然に切れたのでありますから感心の外はありません。

その熱心ぶりを表すかういふ話があります。孔子の弟子の中に大そう活動的な元氣な子路といふ人がありました。

或時子路が楚の國の大夫（家老）の葉公に遇ふと葉公は突然子路に向つて

「あなたの先生の孔子といふ方は一體どんな人ですか。」

と尋ねるのでした。（述而第七）

此のぶしつけな問に子路は一時むつとしました。それもそのはず、孔子の人格は批評するのには餘りに偉大でありましたから……。

さすがに負けん氣の子路もはたと當惑して遂に何と言つてよいやら言葉につまつてもじ／＼するばかりでした。たゞ／＼目をぱちくりさせるばかりでした。

葉公も遠慮をしてか、話はそれなりにになりましたから子路もほつとしました。

その後子路は孔子に會つて、此の話を致しました。

すると孔子は、至極御機嫌で、にこ／＼しながら、

「おや／＼、それは惜しいことをしたものだ。あまりむづかしく考へるといかん。ありのまゝにいふのが一番ぢや。」

と、やゝ首をかしげてをります。子路は、すかさず

「では、何と？」

と希望に輝きながら、師の顔を仰ぎます。

孔子は、又しても微笑を浮かべながら、

「わしの事はお前もよく知つてゐるだらうがのう。そら、わしは何時一度奮發して理想を目ざして進む時には食事も忘れてゐるぢやないか。そして又それを樂しみとして、つまらぬ心配事など、とんと忘れてゐるではないか。そればかりか第一、年をとるのさへ忘れてゐるといふ始末ぢや。そのことを言へばそれでよかつたに……。」
孔子は實に此の言葉通りの人であつたのです。高雅、賢明、勇猛、精進!! それは

孔子の人格の要素でありました。

昔の豪傑といふやうな人は、學問が無くともあらはれることもありませうが、今日文明の社會に於て賢明有爲の人となり立派な活動をしよとならば、どうしても學問の力に俟たなければなりません。しかも我々の學業を立派に成就させるものは一に熱心の賜だと言はなければなりません。

今の時代は如何なる身分の人も皆、孔子のやうに學問と熱心とを要求するのであります。專問の知識は無論のこと更に常識を要求してをります。今や世の中は思想に於て實際に於て非常に複雑になつて來ました。各人の個性は自由に飛躍する。文化は各種各様に進展する。しかも經濟的關係は益々複雑になるといふ有様。本當に生きることは、ますますむづかしくなるばかりであります。

今やお互に理解しあひ、同情しあつて、各自適材は適所を得るやうにして共存共榮を計るべき最も大切な時機に際會してゐると思ひます。文化は文化を生んで世の中

は、ますます複雑となる。世の中が複雑となつて生活は困難となる。生活が困難となつて變つた思想が續出する。

此のめまぐるしい世の中に身を處して、人をも身をも誤らないものは、實に現代の要求する大切な常識だと思ひます。こゝに常識といふのは何人にも必要であり廣く行渡らねばならぬ全人格の判斷といふ意味に外なりません。

しかし其れは單なる物識りと言つたやうな淺薄なものであつてはならぬはずで、かの多種多様な文化と生活と思想とを通じて、其の中に眞に正しい道を洞察してゆく常識がそんなにやすくと生れるわけはありません。それは深く學問に根柢を持つたものでなければならぬと思ひます。

同じく常識といつても時勢の進歩につれて、其の内容は變化すべきものだと思ひます。カビの生えたやうな常識を振廻すのは文化のために、悲しむべきことであります。我々の理想の發展を妨げない寧ろ其の發展の礎としての常識がどうしても生れ

て來なければならぬと思ひます。

世の中は廣い。頭の古い人もあれば新しい人もあります。ところが古くもなければ新しがるでもないといふ人で、時と場合とに應じて處すべきに處して其の判斷を誤らず、萬人から敬愛されてゐるといふ人があります。たとへ反對者があつても又其の反對者からも敬重せられて行くといつた人であります。世の中が變りに變つてどういふ状態にあらうとも、少數とはいへ必ずさういふ人があるものだと思ひます。

かういふ人こそは、現代の要求する常識の持主でありませう。さういふ人のものを判斷するところは餘程味があると思ひます。

思想が悪化したとか社會が悪化したとかいふのは、つまり悪思想を持ち、悪行爲をする人が比較的多い場合をさすのでせう。

しかし如何なる時代に於ても思想に於て實行に於て頼りになる人が全然無いとは考へられません。たゞ人智が開け、文化が發展するにつれて、色々の思想が雨後の筍

のやうに現れてまゐりますと、判断に苦しんだり、取捨に迷つたりする人が多くなる。そこに危険が伴つてくるのだと思ひます。

其の判断を誤らずにやつて行く。それが即ち現代の要求する常識である。それは右すべきか左すべきかの正しい方向を示すものだと思ひます。方向が正しく定まつたら一々の判断は正しくならずにはゐないわけです。此の常識の根本が確立したら一々の行動もしつつかとしてくるはずだと思ひます。

かうした常識が生まれるためには無學でよいわけはありません。そこに人間と社會文化と生活を見透すだけの學問の根柢を必要とするわけでありませぬ。

かういふ人の判断は即ち現代の要求する常識であるのですから、比較的それと思はれる人に親しみ其の判断をつとめて聞くやうにし又自分からも十分に判断するやうにしてゆけば自然にさういふ常識が養はれると思ひます。

さういふ判断(常識)が社會に普及して勢力を持つて來ると、もう餘計な彌次馬の

出るすきは無いはずでせう。さうなれば口やかましい人や騒々しい人が少くなつて人々は力強く精進に精進をつゞけるやうになる。そして文化も生活も長足の進歩をする。

誰も皆心から幸福を感じるやうになる。我々はもつと一科學に藝術に生活に精進し没頭すべきだのに、かうした常識を缺くために、迷つたり、ゆがんだり、彌次つたり騒いだりして、實のある仕事には手がつかず大へんな無駄をしてゐるのだと思ひます。要するに日常生活に於て判断を誤らないこと、それが常識です。

多種の思想と多様の社會とを見究めて自分の生活を決定するところの智、それが即ち現代の要求する常識に外ならないと思ひます。かういふ常識は道德的生活に入る前提であります。そこで此の變化流轉極まりない世の中に處して心を安んじて精進するためには、先づ其の時代の有徳にして人望ある人に親しむやうにし、その人にあやかつて實行に精進するか、又は廣く深く思想にひと苦しみました上、自ら自己の進路を開拓して正しく力強く生きるか。目ざすところは、どこまでも「よき判断によるよき實

行」か又は、「よき實行によるよき判斷」を以て生きることではなければなりません。

孔子が

「仁に親しむ。」(學而第一)

とか

「有道について正す。」(學而第一)

とか申して居られるのは之に外ならないと思ひます。

仁者に親しみもせず、有道の人にもつかず、自分に都合のよい思想の持主や書物にばかり親しんでゆく、それぢや人間になりそこねてしまはずだと思ひます。

孔子は又

「學んで思はざれば罔し。」

と申して居られますが、人眞似ばかりしてゐて、自分から十分にしかも創造的に判斷することが無ければよい智慧の出るはずもありません。

今の世の中の缺陷は、こゝにいふ常識の缺乏にあるのではありますまいか。それが生まるべくして生まれないであるところに現代の不安がある。

健全な然も卓越した常識の無い社會には、奇怪な思想と論説とが横行します。そして人々は其の取捨に迷ひ、徒に好奇心の奴隷となつて浮腰になるばかりです。腰が浮いたら、相撲は負けとしまつてゐます。それは相撲ばかりではありません。

之に反して、かういふ常識が生みなされ、植付けられた時には、人は始めて我に返つて健全な歩みを開始することです。社會も又不安を一掃して、ますます安定を得て來ることです。どうか現代の要求する常識をあらゆる人の心に樹立させたいものです。

常識のある社會は健全である。常識のある人は何時の世にも無くてはならぬ人です。天才は無尊い。しかし天才の人でも無き人もたゞ一時の迷から徒に奇を衒ひ、新を追ふといふことは皆さんのために取ぬところでありませぬ。

そこでこの常識を樹立するためには先づかうした常識を生み出す本であるところの各人の心の中の芽生を尊重したい。

此の點から見ても、常識の人として恵まれてゐた孔子を敬重したいと思ひます。學問好きで熱心な孔子は、自然に又、大そうすぐれた常識の人であつて、人事の微妙なところに能く氣の附く注意のよい人でありました。

之は改めて言ふまでも無く、論語の章句が一々之を裏書してゐるではありませんか。試みに二三を擧げて申して見ませう。

爲政第二に

「故を温ねて新しきを知る……。」

と述べてあります。之は學問修養上最も大切な態度を述べたものとして尊いものだと思ひます。かういふ心掛でしたら奇怪な思想にとらはれたり、過激な行動に陥つたりすることは無くなることでせう。

明治の初年に西洋文明がどつと我が國に流れ込んだ當時には、我も我もと彼の地の文物に心酔しその風習を模倣するものが續々あらはれるといふ有様でした。

坊主頭を、たたいて見れば

文明開化の音がする。

當時の人々が西洋かぶれして、頭が一方に傾いてしまつたことを笑つた面白い歌だと思ひます。

之は孔子の所謂「故を温ねる」ことを忘れた結果に外ならないのではありませんか。新を求めて向上進歩を計るといふことも、極めて大切のことではあります。新し

いからと言つて必ずしも眞理だとは限りません。古い事物の中に永遠の意義を持つたものが澤山あります。それ故この言葉は誠に名言だと思ひます。次に里仁第四に「父母の年、知らざるべからず。一は則ち以て喜び、一は則ち以て懼る。」

を怠り、それと言ひ出せぬものであります。孔子がかう言つて注意してくれますとなく、眞を穿つた名言だと、うなづかれます。

それから衛靈公第十五に

「衆之を惡むも必ず察し、衆之を好むも必ず察す。」

とありますが、社會の實相を觀破し危険思想といつたやうなものに容易に迷はされな
いと云ふ知慧が、そこに光つてゐるではありませんか。又季氏第十六には

「君子に九思あり、視るには明を思ひ、聽くには聰を思ひ、色には溫を思ひ、貌には恭を思ひ、言には忠を思ひ、事には敬を思ひ、疑はしきには問はんことを思ひ、忿りには難を思ひ、得るを見ては義を思ふ。」

とあります。

何と行届いた考へ方をする方ではありませんか。何と立派な處世訓ではございませんか。

是等の言葉によつてもわかる通り、すべて、このやうに心を働かせていきましたら一大常識は期せずして養はれるに違ひないと思はれます。

又里仁第四には次のやうに述べてあります。

「賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては内に自ら省みるなり。」

かういふ態度、心掛けでありましたら、知らず知らず自分を賢くせずにはあかないでせう。十五で學に志してから、年々向上發展して止まなかつた事實は實に孔子の好學と熱心とをあらはす立派な證據ではありませんか。そのことについて孔子は

「吾十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えず。」(爲政第二)と申してをります。

すべて學理や道理を明かにすることを好み、熱情を以て其の仕事に身を入れるといふことは、知慧才覺の本であるばかりでなく、之は實に眞人間となり有用の人物となり

る第一歩だと思ひます。

「學ばざれば禽獸に近し」ともいふやうに人は學藝を離れたら、野蠻に逆戻りするより外はありません。そこには人類の光明は少しも認められないであります。

それ故、學問好きで仕事に熱心であるといふ孔子の此の特質は第一に我々の範とすべき點だと思ひます。

四 味ふべき點(其の二)

第二に孔子の非常に眞面目な力強い人であつたといふところに注意したいと思ひます。物がよくわかつてゐるといふだけではなく、物事に對して恭敬の心が厚いのであります。同時に又物事を立派に仕遂げる力を持つてゐるのであります。

孔子は嘗て

「徳の脩まらざる、學の講ぜざる、義を聞きて徙る能はず、不善改むる能はざるは是れ吾が憂なり。」(述而第七)

と申して居りますが、此の語は明かに孔子の眞面目な心持を遺憾なく述べられたものだと思ひます。

心の向け方は即ち其の人柄を卜するめやすであります。何によつて満足するか、何について心配するか、満足といひ心配といつても、其の値打には格段の相違があります。豚となつて満足しようとするのも、ソクラテースとなつて不満足でありたいと願ふのも、皆人それ々の心の高下深淺によるのであります。孔子の人となりについて、その門人の子貢は

「溫良恭儉讓」(學而第一)

といふことを申してをりますが、是又實に孔子の人格の眞面目な一面をあらはしたものであります。

尙又述而第七には

「子温にして厲しく、威ありて猛からず、恭にして安し。」

というてありますが、その眞面目は徹底的でなかく、一種の鋭さをさへ持つてゐたやうに思はれます。

又或時は

「内に省みて疚しからざれば、夫れ何をか憂へ、何をか懼れん。」

などと申して、偉い氣焰をあげてゐるかと思へば又

「志士仁人は、生を求めて以て仁を害することなし。身を殺して仁を成すことあり。」

とまで斷言してゐるくらゐで、いざとなれば死を以て、一身をさし出して自己の眞面目を發揮しようとしてゐるのであつて、なかく、猛烈なのであります。

又「死して而して後止む、亦遠からずや。」

とも言つてゐますが之は大いに其の緊張ぶりを示してゐるものではありませんか。

すべてなまぬるいことを嫌ふといふ一面を持つてゐたやうに思はれます。

しかし、どんなに眞面目であつても無力では心細い。眞面目はやがて力を發揮して來る本でもありませうが、いくら眞面目にやうとしても煩悶が無くならないといふ事實もあります。その煩悶に負けないのが又眞面目といふものでせうがかうした煩悶は皆色々の意味に於てまだ力が確立して來ないために起るのでありませう。心が善くても力が無かつたら道徳の實行は十分期し難いと思ひます。

ラスキンといふ人はかう言つてゐます。

「最善の仕事をした人には皆、動物の本能に近いやうな内心の無意識的の力があつたのである。」

と。さういふ内から湧く力が尊い。たゞそれが正しくて美しいといふところに萬物の靈長だと言はるゝ人間の特色があるのだと思ひます。

此の力の無いところには生命は無いはずです。之を無視したり、萎ませたりしてはなりません。つゝまじやかに之を尊重してゆくこと、それが即ち道徳だと思ひます。徒に道徳の形式にとらはれて氣のぬけたビールのやうになつたら大變です。行ふところは多少拙くとも、神は許して下さるでせうから、我が力を發揮するために正直なれ、眞直なれ、熱心なれ、と、心ひそかに戒めてかゝらなければなりません。

「人の能力といふものは、單にその有る無しといふことよりも、之を使ふ熱心や正直のあるなしといふことに大さう關係があるものである。」

といふやうなことを彼の進化論で有名なダーウインといふ人が言はれてゐたと記憶してゐますが、是は實に徳と力といふものとは密接の關係があるものであるといふこと即ち徳があるから始めて本當の力があらはれて來るものだといふことを述べたものではありますまいか。

かういふわけですから本當の力といふものを考へる時には徳と力とを切離して考へ

ることは面白くないと思ひますが、今しばらく、わかりのよいやうにお話をすゝめて行つて見ることに致しませう。

一體、強者と弱者とでは、道徳の感じ方に於て又之が實行に際して、多少其の色彩を異にすることを免れ難いと思ひます。

古人も友とするのにわるい者として滑稽にも、

「病無く身強き人。」などと數へ上げて言つてをりますが、強い者は血のめぐりはよいが、往々神經の足らぬところがあります。之に反し弱い者は案外物のあはれを感じるのと深く、事物の眞相を穿つた判断をするものであります。それ故、彼の智力、體力、意力、金力、權力等、すべて力の無い者の聲に耳を傾け、其の思想感情を重視することを忘れてはならぬと思ひます。

併しながら道徳の實行實現となると、何と言つても、力(殊に意力・體力・智力)の有る無しが大いに關係して來るのであります。悲しいかな、無い袖は振れません。

こゝに於て又、智力、體力、意力、金力、權力等すべて是等の力を極端に蔑視してかゝることは是又、誤つてゐると言はなければなりません。

一體、世の學者が力主義はいかぬ、すべて徳を本とせねばならぬ等と言ひますけれども、是は、つまり、力の濫用を戒めたものに過ぎないと思ひます。

彼の世界の大戰前に於て、獨逸が其の國力に於て蕚然頭角を現はしてゐたといふことが、決して悪かつたといふわけではありませんまい。ただ之を濫用して道徳的に大いに活用することを知らなかつたのが獨逸の一大失態だと思ひます。

高尚な優れた理想が無くて、金力や、權力や、意力や、智力があるといふことは恐ろしいことでもあります。本當の力で無いものを力と思つて動く其の心が恐ろしいのです。

そんなことでは、きつと、つまづいたり、苦しんだり、するにきまつてゐます。いはゆる力といふものを誤用し、濫用し、妄用するものは遂に滅びる日がやつて來ます。しかし又是等の力が、美しい立派な心と結びついたら、此の世の中はどんなによくなる

だらうと、何時もさう思ひます。此の二つが結びつくことによつて、さうして生まれたいもの、それが本當の力であり徳ではありませんか。

力で無いものを力とする恐ろしい心を棄て、正直美しい心があつてこそ、本當の力は現はれて來るものだと思ひます。それを道徳的の力と言つてもよいでせう。世間並の力を失つたり、失敗したりした人が、却つて心の力を獲得し、やがて、一切の力を回復した事實をよく々味つて見なければなりません。

本當の力を獲得した人は、色々のよい仕事が出来ればかりではなく、多くの人を助けてあげることが出来ます。世の中には、人に助けられなければどうしても生きられないといふ人もありますが、人と生まれたからには、なるべく助けられる仲間になるよりは、助ける仲間に入ることが此の上も無い幸福だと思ひます。それには人間が善くて、力があるといふことでなければ駄目でせう。

少しをかきな言ひ方ですが、弱くて良心が鋭敏ですと、ますます弱くなる。強い上

に良心が活躍して來ると、ますます強くなるといふのが一面の事實だと思ひます。

良心の有無は實に我々の人格の高下に關するのでありますが、同時に、力の有無は我々の運命に關するのであります。

此の理は小は一身より大は一國にまで、あてはめて考へて見ることが大切だと思ひます。彼の楠公の忠勇義烈の魂は、千載の後にも尙燦然と光を放つてをりますが、流石の忠臣も、力が盡きては、どうにもしようが無かつたといふことは湊川の戦蹟が能くそれを物語つてゐるではありませんか。

力の無いことは悲しいことであります。此の世に無力な善人達が如何に多く惱んでゐるかをよく知らなければなりません。

「天道、是か非か？」

之は無力は善人達の泣言ときまつてゐます。かう考へて來る時に、弱いものは眞面目に、眞劍に先づ力の涵養樹立を計ることが第一でせう。強いものは人間味豊に力の

統御活用に意を用ひることが肝要かと思ひます。

之は言ふまでも無く道徳そのものではありませんか。

道徳はもつと、力を中心に考へられてよいと思ひます。愛を道徳と言はずに愛の力を道徳と言ひたいのであります。力を輕視した道徳觀によつては人と社會との健全と進歩とは到底期せられないと思ひます。

我々は一にして二なき渾然たる力の充實した道徳家を渴仰するものであります。

かういふ意味に於て私は孔子の眞面目と共に其の力強さを嘆美したいと思ひます。力と徳との一體となつて光り輝く其の人格を味つて見たいのであります。

次に少しく力の人としての孔子を尋ねて見ることに致しませう。實力の人孔子は仕事の上に於て、十分に其の知力能力を發揮していくといふ風でありました。我々は常に實力の涵養を忘れてはならぬやうに實力の人孔子を忘れてはならないと思ひます。

孔子の二十歳前後の頃でありました。孔子は、魯の國の大夫（家老）である季氏の

倉庫の役人となつたことがあります。ところが出納が誠に嚴重で寸分違はないといふ有様、それに料量が太そう公平であるといふので大いに實績を擧げ、有爲の人物として注目されるやうになりました。

そこでその翌年は、もう司機吏の役目を仰せ付けられました。之は牧畜を司るのであります、孔子の飼育の方法が大そうよかつた爲、誠に能く繁殖したといふことです。

このやうにすべて仕事を手際よくやつてのけるだけの力を持つてゐたのであります。

尙孔子が實力養成といふことを重視してゐたことは次の言葉によつてもよくわかるかと思ひます。

「人の己れを知らざるを患へず、其の能くせざるを患ふ」(憲問第十四)

尙又非常時に於ては、強い信念の力をあらはしてゐるのであります。

或時宋の桓魋といふものが亂暴にも孔子を殺さうとしました。ところが孔子は平然として

「天、徳を予に生ず、桓魋それ予を如何せん。」(述而第七)

と言つて顔色一つかへないのであります。

匡人の難に遭遇した時にも

「匡人それ予を如何せん」(子罕第九)

と言つて自信力を示してゐるのであります。徳を以て力を洗練し、そしてそれを發揮することを忘れなかつたところが、そこにありくと手にとるやうにわかるではありませんか。たゞく自分の力量を發揮していくといふばかりではありません。他人が無力な意氣地の無い態度をする人、人事とも思はず、大いに之を戒めてゐるのであります。即ち門人の冉求が、力の足りないことをかちますと孔子は力が足りないのじやない。力を出してやらうともせず自分で見切をつけて、すてゝしまふ、それがいけない。

いと言つてゐます。

雍世第六に

「冉求曰く、子の道を説ばざるにあらず、力足らざるなり。子曰く力足らざる者は中道にして廢す、今女（汝と同じ）は畫る（見切りをつける）」

とあるのがそれでありませぬ。一問一答、何と味があるではありませんか。

このやうに孔子は、飽くまで強い力行家であつたのでした。

生存競争に於ても優者たるだけの用意は十分あつたやうに思はれます。

徒に弱者に迎合して、弱者を更に墮落させるといふやうな思想は、孔子のとらざるところであります。弱い者を見捨てるやうな不仁では無論ありませんが常に正しい力を附與することを忘れなかつた孔子の思想を何より嬉しく思ひます。

かうして弱者の薄志放慢、無能無力を警告して之を奮起させると同時に又一方に於ては强者の我儘氣儘、無理無道を抑制して之を反省させることにかけては恐ろしい程

森嚴でありました。

夾谷の會合に於ける孔子の凜乎たる態度はよくそれを示してゐると思ひます。（夾谷

三合について本文）

三十八例話参照）

即ち強暴な敵の齊公をねめつけ、無禮者を誅して、満場の者を戦慄させ、魯の君、

定公を助けて無事に歸國し、見事に其の使命を果したのでした。

若し此の時、孔子がゐなかつたら魯の國は、どうなつたでせう。それは考へても恐

ろしいことです。魯の國の國難を救つたものは實に孔子の力でありました。正義の主

張實現となつてあらはれた、その異常な力でありました。

自己の天分能力を自覺し、之を自由に十分に發揮して、我と我が眞理に對する愛の

徹底を期することは、最も大きな善事でなければなりません。正直に眞劍に、そして

人間味豊に、此の仕事にたづさはることによつて、正しい力と大なる徳とは自然に養

はれて來ること、思ひます。

少年論語讀本

六九

「歳寒うして然る後松柏の彫むに後るゝを知るなり。」(子罕第九)
 と嘗て孔子は申してゐます。有力有徳なるもののみひとり榮えることを言表したものでせう。是は實に我々の無力と不徳とを戒めたものとして暗示に富んだ味のある言葉ではありませんか。

このやうに孔子は自ら力量を養ひ、之を自らあらはしてゐるのでありますが、力があるからといつても、無理無法は絶対にしない。力を以て徳を行ふと言つた風で、あくまでも正義人道に立脚してゐるのであります。そして其の道徳的な眞面目な天分と力量とは其の人格の中に融和され一體となつて現はれてゐるのであります。

衛靈公第十五に「言忠信、行篤敬ならば、蠻貊の邦と雖も行はれん。」とありますが、これこそ實に孔子の此の本領から自然に發せられた力強い叫ではありませんか。道徳を離れて生きることを望んでゐなかつたことは「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。」の一語にも能くあらはれてゐると思ひます。

眞面目で力強い。力持で正しい。之が我々の孔子の人格について學ぶべき第二の點だと思ひます。

五 味ふべき點(其の三)

第三に 温味のある奥ゆかしい點を擧げたいと思ひます。即ち情のこまかい趣味に恵まれたゆとりのある其の人格を味つて見たいのであります。
 孔子は未だ極めて幼少の時に父の叔梁紇を喪ひました。其の後、母の顔氏は、豊でも無い家計を切り廻し、人知れず色々苦勞をして孔子をお育てになりました。親思ひの孔子は、母の苦勞をよく知つてをりました。又其の愛情に深く感じてゐるのでした。

「どうか何時々々々までも、生きて丈夫であつて下さるやうに。」

とは母に對する孔子の心からの願ひでありました。ところが

「樹、靜かならんと欲して風止まず、子養はんと欲して親俟たず。」

の言葉に違はず、孔子が二十四歳の時、此の大事なお母さんは遂に永眠されてしまつたのです。やさしい孔子の嘆きはそれはくゝ一通りではありませんでした。

當時、どんなに悲しんだかといふに、既に三年の喪に服し、母を祭つた後であつたにもかゝらず、五日目に琴を弾いたが聲がたゝなかつた。そして十日目に始めて笙歌を成したといふことであります。

孔子の親に對する 温い情は、その生前は勿論死後にも及ぶといふ風でした。それは非常に祭を重んじたことでもよくわかります。そして祭る時には、まるで生きてゐる人に物言ふやうに真情流露丁寧に祭るといふ風でありました。

かういふ風でありましたから、孔子がいよゝゝ諸國遍歴の途に上らうといふ時には永らく故郷を離れなければならないのであるから、見分け難くなるやうな場合に立ち至

るといけないといふので父母の墓の上に四尺餘の墳を作つたといふことであります。

併し、此のやうに悲しんでゐるからとて、本心を失つてゐるのでは無い。此所は餘程注意すべき肝心なところであります。

「哀しんで傷らず」

といふ言葉は實に孔子の心情そのまゝをあらはしたものでありませう。

どんな場合にでも、本心を失はないで、世間の義理や本務を全うして行きながら、しかも一面にかういふ純情をあらはしていくところそこに孔子の人格の味がたゞよつてゐると思ひます。

凡人だと世間前をかねて涙を見せぬはよいが、何時のまにか純真さも無くなれば本心まで破つて冷淡無情になり易いものであります。

「武士は食はねど高楊子」

はよいが、虚偽に陥つて、正直性、純真性を失ふことは恐るべきことだと思ひます。

世俗の必要は往々我々に虚偽・虚飾を要求します。併し我々は不純な世渡りの巧者となるよりは、清淨無垢な人間であることが何より大切だと思ひます、學而第一に「父在さば其の志を觀、父没すれば其の行を觀る。三年父の道を改む無きは、孝と謂ふべし。」

と言ひ、里仁第四に

「父母在さば、遠く遊ばず、遊ぶに必ず方あり。」

とも申して居りますが、之に依つて見ても、親切丁寧溢るゝばかりの温情が脈々として其處に動いてゐるではありませんか。

尤も是等の思想は多少消極的に失し現代人に適合せぬところもありますが、譬へ厚情慈悲に失することがあつても、薄情冷酷に陥ることは斷じて無かつたのであります。さて孔子の温情は家族に對するばかりではありません。他人に對しても鳥や魚に對しても、こまやかにそれがあらはれてゐるのであります。

人の死んだやうな場合には、其の家族の人達に心ゆくばかりの同情を注いで共に泣くといふ風でありました。之に關し

「喪ある者の側に食すれば、未だ嘗て飽かず。子是の日に於て哭すれば則ち歌はず。」

(述而第七)

と言ひ又、

「齊衰の者(喪服をつ)を見ては、狎れたりと雖、必ず變ず。(容貌を變じて哀しみの情を表す)……凶服の者(葬式の服)には之に式す。(敬禮) (郷黨第十)

などと申して居るのであります。

他人の不幸を我が事のやうに感じてゐる様子がありくと眼の前に見えるやうではありませんか。

殊に愛してゐる門人の死に際しては、しばしく悲嘆し慟哭してゐるのであります。

高弟顔淵の死んだ時には、聲まで立て、嘆き悲しんだといふことです。先進第十一に「顔淵死す。子、哭して慟す。從者曰く子、慟せりと。曰く慟する有るか。夫の人の爲に慟するに非ずして誰が爲にせん。」

とあります。又、門人の子路が死んだ時には、

「噫、天子をたちきり。」

と言つて、心をふるはして残念がらのでした。

又或時その門人の冉伯牛が不幸にして悪性の癩（癩病）を病み、今將に死なうといふ時に、孔子はわざ／＼其の居所を尋ねて見舞つてやり、同情の餘り、その手を執つて共に泣いたといふことであります。此のことにつき雍也第六に

「伯牛疾あり、子之を問ひ、牖より其の手を執つて曰く、之を亡はん。命なるかな。斯の人にして斯の疾あり、斯の人にして斯の疾あり。」と申してあります。

それ故、不具者に對する同情は又格別のものがありません。郷黨第十に

「冕者（爵位あり）と瞽者（盲目）とを見れば、褻れたりと雖、必ず貌を以てす。」

といつてあります。又子罕第九には

「子齊衰者と冕衣裳者と瞽者とを見、之を見て小なりと雖、必ず作つ。之を過ぎれば必ず趨る。」

と言つてあります。

尙、鳥魚に對しては

「子釣して網（網でたく）せず、戈（糸をつけた矢）して宿（鳥のねて）を射ず。」（述而第七）

と言つてあるやうに、同じ捕るにも残酷なことはしないといふ風でありました。

かういふ温情を持つた人は、まるで太陽のやうであります。冬のうら／＼かな日に、ひなたぼっこをしてゐらつしやるお爺さんお婆さん達を想像してごらん下さい。皺をのばして、笑顔作つていかにも氣持よさうにしてゐるではありませんか。誰に此の

平和なひなたぼつこの邪魔が出来ませう。

温情や愛情といふものは、人の心を潤し、人の心を太らせる實に尊いものだと思います。

「愛あるところに神在す。」

と、トルストイといふ偉い人は申しました。

「おのが胸中に愛を有し、慈悲柔和の生を送り、悪と戦ふものは、神と共に活き神と同一精神たるべし。」

と、有名なボエーメといふ人が申してをります。

しかし孔子は、愛があり、同情心に富んでゐたからと言つても、愛に溺れるとか、無差別平等に無茶苦茶に流れるといふことはなかつたのであります。そこが又そのえらいところだと思ひます。

郷黨第十に

「廐、焚く、子朝を退いて曰く、人を傷けたるか。馬を問はず。」

とあります。

馬を愛しないわけではないが、人を先に立てて順序を誤らなかつたのであります。

「愛は盲目なり。」

とも申しますから、よく注意したいと思ひます。

漫々と涯知らぬ心の海に、愛を一ぱい蓄へたいものです。そしてそれを總べてのものゝ上に注いで行きたいものです。静かにそして間違無く……。名も知らぬ路傍の草花にも、愛を感じては、もう、之を手折ることが出来なくなります。温情に富んだ人は、次のやうな木の嘆を耳にして、斧持つ手をゆるめることでありませう。

やをら、待たしやれ、

小木ぢやとて、

享けた命は、有るものを、

情知らずの方わいな。

小木のかうした、さゝやきを聞くとは、何といふ奥ゆかしいことでせう。

かういふやさしい心持、それが孔子の心持だつたと思ひます。

さて、かういふ温味は、やがて色々の趣味となつてあらはれてゐるのであります。

どのやうに知能がすぐれ、真面目だからと言つても、始終利害得失の間に齷齪してゐ

るやうでは、人として誠に物足りない感じが致します。ゆとりのある人生、餘裕のあ

る生活、それは非常に尊い。餘裕も趣味も無いところには、鬭争があるばかりであり

ます。

人は時にはすべてを忘れて悠々自適することが、大切だと思ひます。

かうした心持を培ふために大切なものは文學藝術でなければなりません。

此の點に於て、孔子は詩歌や繪畫音樂にも、非常な趣味を持つてをりました。とり

わけ、音樂は禮と共に孔子の最も重んじたところであります。

禮を重んじ大義名分を正したところの孔子は一面に於て文學藝術の世界に於て人々が相親和することの必要と洒脱風流の心持を持つことの大切なことを認めてゐるのでありました。

音樂に非常な趣味を持つてをられたといふことは

「子齊に在りし時、韶を聞いて、三月肉の味を知らず、曰く圖らざりき、樂を爲すの

斯に至らんとは。」(述而第七)

といふ言葉にも能くあらはれてゐます。

そして又、音樂を鑑賞したり批判したりしてゐるのであります。八佾第三に

「子韶(帝舜の音樂)を謂ふ、美を盡せり又善を盡せりと。武(武王の音樂)を謂つ

て曰く、美を盡せり、未だ善を盡さず。」

と申してをります。

そのやうに能く音樂がわかるばかりでは無く、自分からも巧妙に奏することが出来

たのでありました。憲問第十四に

「子磬(石の樂器)を衛に擊つ。黃(土などを運ぶ)を荷うて孔子の門を過ぐるものあり、あるか曰く心な、磬を擊つや。」

とありますが、門前を通る人までが、孔子の磬といふ樂器を擊つ手際の巧妙なのにすつかり感心して「うまいなあ、奥ゆかしいなあ。」と言つてゐるのであります。

一體よい音樂といふものは、人の心を和げ、人と人との親和協調を來すばかりではなく、心を優美高尚にするものですから誠に大切なものであります。

之に反し、よくない音樂は、人の心を墮落させるものですから注意しなければなりません。孔子が醜惡な音樂、道ならぬ音樂を排斥したことは非常なものであります。

平素温和な人にも似ず、之ばかりは忍ぶことが出來ないと言つて大そう憤慨したことさへあつたのであります。

音樂に限らず、總べて藝術といふものは娛樂的にばかり流れますとたゞく人の心

を喜ばせ樂しませるといふことが主となり遂には野卑放縱に陥つてしまひます。それだけに又、大いに注意しなければならぬと思ひます。

次に少しく藝術及び藝術的なものについて考へて見ることに致しませう。

「人生は短く、藝術は長し。」

と古人も申して居りますが、凡そ藝術の本質や精神に觸れるといふことは、大そう肝心なことだと思ひます。人間の心を解放して、眞の自由と幸福とに導くもの、それは實に藝術の力でありませう。

永遠から永遠へ、絶對無限の生の躍進を續けさせるもの、不斷の創造と永久の生命に生きさせるものは實に藝術の尊い使命だと思ひます。

藝術によつて我々の生命は血もあり涙もあるものとなるのでありませう。「藝術は人の世を長閑にし、人の心を豊にするが故に尊と。」

と、有名な夏目漱石といふ先生が申してゐます。

本當の藝術！それは、非常に眞面目な宗教的なところを持つてゐると思ひます。ミレーといへば、畫家として世界に有名な人であります。その畫は永遠に不滅の光を放つてゐます。どうして其の畫が多くの人々から尊重されてゐるのでせう。それには先づミレーの人となりを知ることが大切かと思ひます。ミレーは決してみだらな畫家ではありませんでした。大そう宗教的氣分の高い人であつたさうです。ミレーが畫を研究するためにパリへ出發するといふ時に、其の祖母は、かう言つてきかせたさうです。

「私はお前が神様のお言ひつけに背いたり、不忠實になるのを見るくらゐなら、いつそお前の死ぬのを見る方がいゝと思ふ。」
 と。又其の名がパリーの畫界に高くなつた時には
 「お前は畫描になる前から基督教徒だつたといふことをよく覚えておいでなさい。淫らなことに身を賣つてはいけませんよ。永遠のためにお描きなさい……。」

と言ひ送つたさうです。ミレーは元よりこの祖母の期待するやうな人でありました。すべて氣品の高い、け高い藝術は眞面目な眞劍な精神から生れるものだと思ひます。現に我々は藝術家だといふ人で大そうおだやかな、しつかりした人を見受けます。そして下手に道徳など口にしてゐる人よりは、ずつと親切を盡したり、道理のあることを言つたりしたりしてゐるのであります。尙又非常に氣節氣品が高いのであります。「あ、此の人は本當の藝術に觸れてゐるのだな。」と、いつも、さう感じます。本當の藝術でしたら、正しく麗はしい行をさせずにはおかないものだと思ひます。一體、おしやれな薄情者が藝術家だなどと言つてゐるのがをかしいではありませんか。藝術が劣情を巧みに満足させる手段となつた時に羅馬は滅亡したのだと言ひますがそれは全く本當だとうなづかれます。自己本位に享樂的ばかり流れるものは、すべて、藝術の敵だと思ひます。
 「眞の美は、眞や善と離れたものでは無い。」

と哲學で有名な西田博士が申してをられます。よく〜味ふべき言葉だと思ひます。やす〜と藝術の本質に觸れてゆける恵まれた人は本當に幸福だと思ひます。しかしベーコンといふ人も言つてゐるやうに、人には案外愚質が多いものだとも思はれますし、殊に情には溺れ易いものでありますから、本當の藝術家には叱られるかも知れません。「藝術と失敗」といふやうなことを世間並に考へてお互の戒としてゆきたいと思ひます。

何によらず、一つの藝術的なもの、體得は人の心を躍らせます。バイオリン一つがよく弾けるといふ愉快は、人の心の全體を奪ひ去るのに十分であります。富士の山を畫くことが得意だと言つて、世の中を面白をかしく渡りあるいた人もあるといふことを聞きました。

藝術的なものゝ魅力は、なか〜恐ろしい程であります。自分の心が躍るばかりではない。他人の心まで躍らせます。その結果大いに持囃されることになります。

人から歡迎され持囃される愉快は、又格別なものでありますから、心の手綱を引きしめておませんと、つい浮かれてしまふことになります。さうして其の結果は道にはづれた大變な事をしでかすことが往々あります。

それ故、藝術の三昧境にひたることの尊さを思ふと同時に此の躍る心のために禍を招かぬやうにする。それが藝術乃至藝術的なものに心を寄せる人達の特に戒めねばならぬところではありますまいか。

すべて藝術的なものは、人の心を百花満開の春に酔はせる魅力を持つてゐるかと思ふと又一方人に墜落の憂目を見せる魔力を宿してゐます。

世の若い少年少女達が、此のためにどんなに其の運命を悲惨に導いたか數へ切れぬ程でありませう。眞に藝術を鑑賞する力もなく、小説等に讀み耽つて身を誤り、親の命を縮めた實例は、頻々として新聞に報道され人の心を驚かしてゐるのであります。知識にも道徳にも無論、感情といふものは伴ふものであります。藝術は特に感情

を主とするものでありますから、そこに藝術が人の心を陶醉させると同時に耽溺させる重なる理由があるのでは無いかと思はれます。

要するに藝術は、人生に無くてならぬ非常な妙薬であります。鑑賞力の足りない人には、時に恐るべき毒薬ともなることがあると心得てゐたら、大過無くしてすむだらうと思ひます。どこまでも藝術を研究して、其の尊い本質に觸れてゆくことは大切であります。近頃藝術でなければ夜も日も明けぬと考へ、之に酩酊して光、輝く藝術の本城に肉迫せぬ前に、途中の雜草に心奪はれ、道に迷つてゐる事實を見るにつけ、「危い」と思ふ餘り一言したわけであります。

さて孔子は優れたよい音楽に着眼し、若い時から音楽の大先生をさがして、或は晋に往き、或は周に往くといふやうに熱心に研究し、しかも先生を凌駕する程上手になりました。そのやうに常に音楽その他の藝術を尊重してたえず高尚な趣味に生きて行つたといふことは我々の大いに味ふべきことだと思ひます。

或時のことであります。門人の子路と曾點と冉有と公西華の四人が孔子の傍に侍して居りますと、孔子はいかにも氣持よささうに打ちくつろぎながら申しました。

(先進第十一)

「さあ、今日は十分うちとけて話すことにしよう。わしがお前達より年長者であるなどと思つて遠慮してはいけない。何でも自分の思ふところを存分にいふこと、しよら。よいか。」

四人は、うなづいて、

「はい、よろしうございます。先生何か面白いお話でも御座いますか？」と、一齊に師の顔を見守るのでした。

孔子は意味ありげに口を開いて「外でもない。日頃お前達は、人が自分を知つてくれぬと言つて、それを不満に思つてゐるやうだが、若しお前達のことを知つて立派な役につけてくれたら、どんな理想

抱負を以て世に立つ積りぢや。それが聞きたい。」と申されました。

すると子路は、真先に偉さうなことを述べたのでした。

再有も公西華も、それ〴〵何か手柄でも立てるやうな意志を述べて立身榮達を夢みてゐるのでした。

最後に曾點(曾參)の父)に向つて

「曾點、お前はどうか、」

と申しますと、曾點は其の時瑟(琴に似た樂器)をとぎれ〴〵にひいてゐましたが、カラリとあいて起上り、さも言ひにくさうに躊躇しながら、

「私の考は、三人の方々と少し違つてをりますが……。」
すると孔子は

「今日は、めい〴〵思ひ〴〵の志をいふのだから何も遠慮には及ばない。」

申としましたので、曾點は微笑を浮べながら、

「私はたゞもう晩春の暖い日に、さつぱりとした春着でも着て、青年を五六人、子供を六七人も連れて郊外を散歩し、沂の温泉に浴したり、舞雩の丘で涼んだりして悠々と歌でも歌つて歸つたら、さぞ愉快だらうと、そんなことばかり考へてゐるのですよ。はは、はは。」

と言ひます。

すると意外にも孔子は大そう満足さうなおもひで、

「ほう、よく言つてくれた！ わしの望みも點と同じぢや。」
と申されました。

此のやうに孔子は、或場合には、社會を離れ、名利を棄てた趣味の世界に生きる高雅風流の境地を愛好せられたのであります。

「詩に興り、禮に立ち、樂に成る。」(泰伯第八)

といひ、

「道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ。」(述而第七)

といはれてますが、「樂に成る」「藝に遊ぶ」と言つてゐるのは皆藝術の三昧境にひたることの悦びと樂しみを力説したものに外ならないと思ひます。

之に加ふるに深遠な哲理や高遠な宗教にも通じてゐるといふ風でありました。

六 仰ぎ慕はる其の人格

以上によつてもわかる通り、孔子は其の天分と相俟つて其の學問修養は廣く深くありましたから、其の人格は又おしはかることの出来ない程の奥ゆかしい味のあるものでありました。子罕第九に、

「顔淵喟然として歎じて曰く、之を仰げば彌高く、之を鑽れば彌堅く、之を瞻れ

ば前に在り、忽焉として後に在り。」

とありますが、高弟の顔淵すら、其の偉大な人格を推量することが出来ない程であつたのでした。又子張第十九には

「叔孫武叔仲尼を毀る。子貢曰く、以てする無かれ。仲尼は毀るべからず。他人の賢者は丘陵なり、猶踰ゆべし。仲尼は日月なり。得て踰ゆることなし。人自ら絶たんと欲すと雖、其れ何ぞ日月を傷まんや。多に其の量を知らざるを見る。」

とありますが、日月にも較ぶべき其の人格の前には、之を毀る者が、却つてもろくも淡雪のやうに消失していく程であつたのであります。

思へば誠に偉大な人物でありました。

嘗て私は片田舎の見すばらしい小さなあばらやの床の間に次のやうな掛物を發見して非常な興味を感じたことがありました。

「孔子孔子大なるかな孔子、孔子以前に孔子無し、孔子以後に孔子無し。孔子孔子大

なるかな孔子。」

何と面白い讚ではありませんか。それに、このやうな片田舎にまで孔子の徳は其の光を放つてゐるのかと思ふと無量の感に打たれてしまひます。

我々の一生には常に目標といふものが無ければなりません。

人間の持つべき理想の如何なるものであるかは理のつんだ話によつて知ることが出来ませう。しかも此の理想を生々と具現してゐるものは、偉大なる人格者その人ではありませんか。

我々は修養の道程に於て、常に聖賢偉人の傳記を研究し玩味して、我れと我が心を養ふことを努めたいものだと思ひます。

此の意味に於て、孔子の人格はどんなにかよい道しるべとなることでありませう。人多き人の中にも人ぞなき

人となれ人、人となせ人。

人の中の人となることは容易のことではありません。まして孔子のやうな偉大な人格者を仰ぐ時、我々の貧弱な姿を思合せて非常に淋しい氣持にもなることでせう。そして煩悶もすれば懊惱もする。併しそれは尊い。決して失望してはなりません。「千里の道も一步より始まる。」と申します。高きを望み、遠きを望む者は、先づ第一歩を踏みしめてかゝらなければならぬと思ひます。

七 少年諸子への希望

我が愛する少年諸子よ、希望は皆さんの生命である。

前途は遠遠であるが、毎日の生活は尊い。

今日といふ日は、二度と再び戻つて來るものではない。

怠惰の果は、どうならう。

「何時の間にやら、年波寄せて、

あらが頭を、しつかとつかむ

果ては、島根に投上げられて、

變り果てたよ、こんな者に。」

多くの人々に皆此の嘆きがある。

「變り果てたよこんなものに」聞いただけでもぞつとする。

皆さんにだけは、かうした失望をさせたくない。

孔子曰く

「朽ちたる木は雕るべからず。糞土の牆は、朽るべからず。」と。(公冶長第五)

此の言葉の意味がわかつて欲しい。

偉大な思想は赤心から來るといふ。

ゲーテの次の詩は、ほんたうによい戒ではありませんか。さあ、之から靜かに、し

んみりと歌つて見ることに致しませう。

急がずに、休まずに

ゲーテ

「急がずに、休まずに、」

是ど汝の胸飾、

心の底の奥に留め、

浪風荒く吹き捲くも、

花咲く小徑たどるにも、

世を去るまでの旗章。

○

「急がずに、」心して、

心の駒の手綱取れ、

静かに思ひ、能く計り、
決めて全力もて進め、
急がずに、歳を経て、
思慮無き行爲に悔みすな。

○

「休まずに、よく勵め、
過ぎ行く年の足早し、
何にか朽ざる善き事業、
浮世の旅の記念物、
遺して我が身は果つるとも、
世々に長生ふその榮譽。

○

「急がずに、休まずに、」

静かに天の命を待て、
義務は汝の指南車ぞ、
何はともあれ正を踐め、
急がずに、休まずに、
戦鬪終へて後の暁。(愛吟参照)
最後に私は孔子の略傳を記して、其の人格を偲ぶよすがとしたいと思ひます。

八 孔子略傳(十八史略)

孔子、名は丘、字は仲尼。その先は宋人なり。正考父といふものあり。三命してま
すく恭し。その鼎の銘に曰く、

一命して僂(頭を下)し、再命して僂(僂よりて)し、三命して俯し、墻に循つて走り、亦余を敢て侮るなし。こゝに饘(粥)し、以て予が口を餉す。

孔氏、宋に滅び、その後孫魯に適く、叔梁紇といふものあり、顔氏の女と尼山に禱つて、孔子を生む。兒として嬉戯するや、常に俎豆(器祭)を陳ね、禮容を設く。長じく、季氏の吏となつて、料量平かなり。かつて、司穢(牧畜の官)の吏となつて、畜(羊牛)蕃息す。周に適いて禮を老子に問ふ。反つて弟子やうやく益々進む。齊に適く。齊の景公、將に待つに(待遇)季孟の間を以てせんとす。孔子魯に反る。定公、これを用ゐて終へず。衛に適く。將に陳に適かんとす。匡を過ぐ。匡人、かつて陽虎に暴せらる。孔子の貌、陽虎に類す(似て)これを止む。すでに免れて衛に反る。靈公の爲すところを醜とし、之を去り、曹を過ぎ、宋に適き、弟子と禮を大樹の下に習はす。桓魋、その樹を伐り抜く。鄭に適く。鄭人曰く、「東門に人あり、その類(額)は堯に似、その項頭(額)は臯陶に類し、その肩は子産に類し、要(腰)より以下、禹に及ばざること三寸、累

々然として(瘦せた)喪家の狗の若し」と。陳に適き、將に、西、趙簡子を見んとして、河に至り、竇鳴犢・舜華が殺されて死せしを聞き、河に臨んで、歎じて曰く、「美なるかな水、洋々乎たり、丘の濟らざる、これ命なり」と。衛に反り、陳に適き、蔡に適き、葉に如き、蔡に反る。楚、人をして之を聘せしむ。(召し寄)陳蔡の大夫、謀つて曰く、「孔子、楚に用ゐらるれば、陳蔡危し」と。相與に徒を發して、之を野に圍む。孔子曰く、「詩に云ふ。咒(牛野)にあらず、虎に匪ず、かの曠野に率ふ」と。吾が道非か、吾、何すれぞ。こゝに於てする。」子貢曰く、「夫子の道、至つて大にして、天下能く容るゝなし。」顔回曰く、「容れられざるも、何ぞ病まん。然る後君子を見る。」と。楚の昭王師(軍)を興して、之を迎へ、乃ち楚に至るを得たり。將に封ずるに、書社(帳簿)の地七百里を以てせんとす。令尹(楚の相)子西、可かず。孔子、衛に反る。季康子、迎へて魯に反る。襄公政を問ひしが、終に用ゆる能はず。乃ち書(經書)を序(理)し、上は唐虞より下は秦繆に至る。古詩三千を刪つて、三百五編となし、皆之を絃歌す。禮樂これより

述ぶべし。晩(老)にして易を喜び、象・象・繫辭・說卦・文言を序(述)す。易を讀むや、韋編(皮の紐)三たび絶つ。魯の史記によつて、春秋(名書)を作る。隱より哀に至るまで、十二世、筆を獲麟に絶ち、筆すべきは筆し、削るべきは削る。子夏(孔子の弟子)の徒、一辭を賛する能はず。弟子三千人、身、六藝(禮樂射御書數)に通ずるもの七十有二人。年七十三にして卒す。

(大町氏新譯參照)

第三章 論語の内容

(一) 學問の光、人格の光

子曰學而時習之、不亦說乎、有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不慍、不亦君子乎。(學而第一)

【讀方】子曰く學んで時に之を習ふ。亦說(悦と同じ)ばしからずや。朋あり、遠方より來る、亦樂しからずや。人知らずして慍みず、亦君子ならずや。

【語句の意味】 ○子曰く 孔子が仰せられるには ○時に習ふ 學んだことを時々復習して翫味すること、
○人知らずして 自分に學徳の備つてゐることを人が知らなくても ○君子 有徳の立派な人

【お話】 學問知識を修めることの出來るといふことは、生れながらにして人に備つてゐる特別の力でありまして、そこが鳥獸と異なつた人間獨特の値打のあるところだ

あります。ですから學問によつて廣く知識を磨き、人の人たる道を學び、そしてそれを時々反覆復習して實行に現はし、だん／＼に身につけて行くといふことは、私達が少しづつでも人らしい人になつて行く本でありますから、こんなよろこばしいことは又とないわけであります。

唯こゝに氣を附けねばならぬのは、學問の性質を正しく理解するといふことです。殊にどんな書物を読んだからとて眞面目な實行といふことを怠りますと、自分勝手な理窟ばかり言ふ口前ばかり上手な輕薄な人となつて却つて人柄を下げてしまふものですから、よく／＼注意したいものです。

しかしどこまでも學問の眞精神を誤らず、學問に依つて人柄才能が磨かれてまゐりますと、良い友達が千里を遠しとせずしてわざ／＼自分を訪ねて来てくれる。會つてお互に有益な語らひをして共々研究するといふことになりますから、友も自分も高尚有爲の人物となつて、ます／＼進歩發展するといふ次第、こんな楽しいことが何處に

ありませうか。これが又本當の友を得る道だと思はれるのであります。口先ばかり上手で、徒に友を求める人もありますが、それは本末を誤つたものと言はなければなりません。先づ自分の人となりや才能を進め、自分の人格を高めることを第一の仕事とせねばなりません。

かうして實の有る人となりますと、もう、めつたに心が迷つたり、ゆがんだりなどいたしませぬ。人が自分を知つてくれやうがくれまいが、さういふことは第二のこととなりまして、づつと人間らしい落附といふものが出来てまゐります。

かういふ人こそは、誠に頼みがひある立派な有徳の人ではあるまいかと、孔子は自分の感想を述べられたのであります。その眞意のあるところを十分に味つて見たいものだと思ひます。

學問の海を帆かけて行く人は、

心ひろく波たゝぬなり

【例話】 支那の宋の代に朱熹といふ大學者がありました。まだ幼い時に孝經といふ修身の書物を教へられ、其の意味を悟つて大そう感じました。そしてその書物の上に

「このやうでなかつたら人ではない。」

と書きつけました。後に朱熹は果して孝經の教に背かず身を立て道を行ひ立派な人となりました。

十八史略といふ書物に

「朱熹の學問、老いていよく篤く、學者共に之を師宗す。稱して晦菴先生と爲す。四方其の人を仰ぐこと、泰山北斗の如し。南使北に至れば、金人必ず朱先生いづくに在るかと問ふ。」

とあります。

書物を讀むものは、すべて朱熹のやうでなければなりません。修身の教訓を讀んでは之を行はんとを思ひ、偉人の事蹟を聞いては、己も亦此くの如くならうと志す者でこそ、始めてよく書物を讀むものといふことが出来ます。唯文字を覺えるばかりでは讀まないのと同様であります。有名な貝原益軒の言葉に

「人と生れて學ばざれば生れざると同じ。

學びても道知らざれば學ばざるに同じ。

道を知りても行はざれば、知らざるに同じ。」

といふのがあります。(少年鑑參照)

やはり支那の宋の代に宰相とまでなつた司馬公といふ偉い人がありました。大そう人格の高い人でありましたから、その薨じた時には、太皇太后や皇帝まで悲嘆の餘り、聲をあげて泣き、涙を流して悲しまれたといふことです。尙そのお葬式の時には、四方から集つて來た大勢の會葬者が、まるで親戚の人でも死んだやうに心から泣いたといふことであります。その偉大な人格は、かうして死後にまで輝いてゐるのであります。

此の人格の高い司馬公は或時晁無咎といふ人に向つてかう申すのでした。

「自分は人に勝ちつたことは、少しも無いが、たゞ平生爲したことで、まだ一度も人に向つて話の出來ないことはない。」と。

正直正路でなければ、こんな立派なことは言へません。
又或時劉安世といふ人が

「一生の間、行はなければならないことを、たつた一口仰つしやつて下さい。」
と申しますと司馬公は

「それは誠である。」

と申しました。すると安世は又

「誠の人になるには、始めどうしたらよいものですか。」

と尋ねますと、司馬公は

「先づうそ、いつはりや、おしやべりをしないことに氣をつけるがよい。」
と申しました。

ほんたうに味のあるお話ではありませんか。

(二) 孝弟は善行の本

有子曰其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣。不好犯上而好作亂者未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者其爲仁之本與。(學而第一)

【讀方】 有子曰く、其の人と爲りや、孝弟にして、上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すを好まずして亂を作すことを好む者は、未だこれあらざるなり。君子は本を務む。本立つて道生ず。孝弟なるものは其れ仁を爲すの本か。

【語句の意味】 ○有子 孔子の門人 ○孝弟 孝は父母によく仕へること(父母を敬愛する) 弟は兄及び長者によく仕へること(兄長者を敬愛する) ○上を犯す 長者にさからひ、之をしのぐこと ○仁 廣く人を愛し行の正しいこと(人の道)

【お話】 親は親として敬ひ、兄は兄として立て、親や兄に多少無理があつたにしろ、ところでも一目も二目もあいて何事も父兄長者に譲るといふ態度を持つた者は根から隠當の人物であります。理窟一點張り、何でも自分の意見主張を抑へることが出來ず、

相手が親であらうが兄であらうが乃至は長者であらうが一切かまはず、たゞく理づめに話をしかけて一步も譲らぬといふ人もありますが、是は少し人情に缺けたところがある人と申さなければなりません。

眞理を愛し、あくまで之を研究し主張するといふことは大變結構なことで、之を缺いたら人類の成長や發達を妨げるばかりではなく人間として生れた甲斐が無いとさへ思ひますが、眞理も主張の方法、發表の仕方を誤れば、却つて世態人情に、しつくり合はず之を害することのあることを思はなければなりません。かういふ結果になりましたら、眞理と思ふことも實は頭の中だけのことで實際上には眞理で無いことになりませう。

父兄や長老に對し、濫い心持を以て、出来る得る限り、自分の我儘氣儘を制して讓ること即ち是等の方々を先に立て、いくとか又は是等の方々の前には大いに遠慮して物を言つたり爲たりするといふ性質の人は、前申す通り、誠に人柄の善い、温味のあ

る人物であります。

そこで孔子の門人の有子といふ人が申しますには、かういふ人柄即ち孝弟といふやうな人であつて、長上の者にさからつたり、之をしのぎ犯すといふことを好む者は殆ど無い。長者を犯すことを好まないもので謀叛を起し世の中を亂すといふものは決してありやしない。それ故、立派な人となるには根本に力を入れるべきである。根本の確立するといふことが、あらゆる善行の本である。

何が人道の根本かといへば、それは孝弟の徳でなければならぬ。「孝は百行の本」と申しますが、家庭に於ける親子の愛、兄弟の愛といふものは餘程大事なもので、此の愛が缺けて居りましたら、社會に立つて廣く人を愛するとか善行を全うするとかいふことは、なかく、おぼつかないことでありませう。それ故、心持はすなほに、やさしく持つことが大切だと思ひます。

出世して世の爲、盡す人は皆

孝弟の道、忘れざる人。

【例話】

山地將軍の名言 山地將軍は何時もかう言はれたさうです。

「少年の時、先輩長者の前に出て、おそれ慎しむ心が無くて、喋々意見など述べ立つるものは、概して廉恥心の無い者であつて頼もしくはない。之に反して、先輩長者の前に出て面を赤らめ、はにかんで物言ふことの出来ないやうな者の中には往々非凡の人物があるものである。」

將軍の此の言葉は確に一面の眞理を穿つてゐると思ひます。人の性行といふものは誠に趣の深いものでありますから、よく味つて見なければなりません。

反抗心と氣概とを混同したり、服従心と獨立心とを全然別のものゝやうに考へたりするのは、皆人間の心理や人物について、其の眞相を味ふことの不十分なために陥る過ではありますまいか。

世には天才を發揮して大いに人類の爲になつたやうな人でありながら、一時親の心に背いたやうに見えた人もあつたであります。併し、さう見るのは皮相の觀察ではありますまいか。

本當の天才だつたら、必ず其の裏面には、涙ぐましい程の、親に對する美しい心づかひがあつた

に相違ないと思はれます。

天才の本質はやつぱり愛ではありますまいか。少くとも人類の爲に役立つやうな立派な仕事をす

る以上、人情に缺けてをつて出来るはずはありますまい。此のことについては何よりも先づ、世に天才だ自由人だと言はれてゐる人々に就て、十分に研究し、深く味つてごらん下さい。必ず大いに悟るところがあるでせう。

長幼の序

長幼の序ありと申すことは、今日に於ては、餘りに世の中には、大切な人生の律法として取扱ふものなけれども、其の實、此れ程必要なものはなく、此れ程有難きものはなし。

子が親に對するにも、妹が姉に對するにも、弟が兄に對するにも、少年が壯年に對するにも、壯年が老人に對するにも、凡そ人と人との交際に於て、此れ程行き渡りたる、都合よき秩序としては無きぞかし。實に古人の言葉は平易にして往々大切なる眞理を言ひあらはすものあり。

世の中に秩序無ければ、世の中は亂暴となり、混雜を來し、喧嘩も起り、騒動も出で來るなり、小は一家より大は一國に至り、室の隅より世界の舞臺に及ぶまで、一として秩序といふものにより

て治められざる者はなし。而してその何れの人々も、如何なる場所にも通用するは、長幼の序といふことぞかし。特に一家の内に於て、若しくは社交の上に於ては、此れ程必要なるものはなし。長幼の序正しうして、一家も治まり、長幼の序亂れずして、社交も圓滑となる。

近き例を擧げんに、白髪の老人をも、後に押退け、倔強なる若者が、我が物顔に上座を占むるが如きは、如何にも片腹痛き次第ならずや。若し長幼の序を正さざる時には、世の中は暴力の支配となり、所謂弱の肉は強の食と申すが如き、あさましき状態を見るに至るも、未だ知るべからず。

姑が媳を下女の如く追ひ使ふは、甚だ見苦しきことなれども、媳が姑を下女の如く追ひ使ふは、亦甚だ見苦しきなり。兄が弟を奴隷視するは悪しけれども、弟が兄を凌ぐは、決して善き事にあらず。若し一家に於て、長幼の序を正し、姉は妹を愛し、妹は姉を敬ひ、いはゆる長者は其の長を恃まずして幼者を引立て、幼者を幫助し、幼者は其の長者に従順にして能く長者を扶け戴かば、一家は即ち平和なるべし。一の社會此の如くならば其の社會は又平和なるべし。

長幼の序は、神が立て給ひたる自然の律法にして、人間が細工したるものにあらず。人若し此に従へば幸福あり、逆へば禍害あり、慎まざるべけんや。(處世小訓)

(三) お上手よりも眞心

子曰巧言令色、鮮矣仁。(學而第一)

【讀方】 子曰く、巧言令色、鮮し仁。

【語句の意味】 ○巧言令色 言葉は巧みにし、顔色をよくして、人の機嫌をとる人 ○鮮し仁。仁者は殆ど無い。

【お話】 「匂ふ花の下にはトゲあり」といふ言葉もありますが、口先巧に顔色もにこやかと人の機嫌をとるからと言つても、お腹の底まで口や顔の通りであると誰が保証出来ませうぞ。しかしどちらかと言へば口重なにい顔の人よりは口の軽い笑顔作つた人の方が人の心を惹き易いものですから皆知らずく之に心を寄せるといふことになり易いものであります。ですから甘言の人、笑顔の人には思ひながらつひうか〜

と釣り込まれてしまひますが、いよく／＼となると一向あてにならぬこともあります。尤も眞の快活の人は能く言ひ能く笑ひ、ちよこちよこと手軽に善い事もすれば親切も盡すといふ風で誠に感じのよいものでありますから之と巧言令色とを混同してはなりません。要點は其の心にあるので心が正直で親切であれば、その外の表はれたところに多少の明暗があつてもそれは止むを得ないと思ひます。それから先は個性の相違ですから……。

一體本當の笑ひは眞面目な眞剣な生活に伴ふものだと思ひます。

眞面目を發揮するためにも足らず遂に生涯笑ふ機會を持たなかつたとしても寧ろその充實した生を祝福したいと思ひます。

氣のきいた口を一つも餘計にきかうとするよりは先づ我が心にぬけ目の無いことが第一です。

一時の氣休めに人の機嫌をとらうとするよりは我と我が誠意の程をたゞして見るこ

とが肝要です。

誰しも人に好かれ歓迎されることは心地よいものですから、やゝともすると巧言令色に陥り易いのでせうが、かういふ人には仁心を有する者が殆ど無いと孔子も申されてゐるのでありますから、我々は先づ何よりも眞摯質實の精神を涵養し、やがて心の底に本當の喜悅快樂の種を播かねばなりません。

氣も知らで顔にばかされ嫁とりて

あとで後悔すれどかへらず。

【例話】 西郷南洲の至誠 維新の三傑の一人である西郷隆盛は、物に頓着しないやうなところがありましたが、滿身皆至誠の人でありましたから、多くの人々から敬愛せられました。山地將軍は嘗て人に向つてかう申しました。

『余が南洲を偉い人物だと思ふたのは、宮中に御宴會があつて近衛の佐官以上御陪食を仰せつけられた時のことであつた。此の時の御料理は珍らしい西洋料理であつた。吾々はまだ西洋料理の食

ひ方を知らなかつた。殊には堂々たる宮中の御宴といふので、ナイフやフォークの取扱ひにつき一方ならず心配したが、結局皆西郷さんのやる通りにやればよからうと言つて見てゐた。すると西郷さんは、

「私共は軍人でありまして、一向禮儀作法を心得ません。若し粗忽のこともありましたら、どうぞ御許を願上げ奉ります。」

と申上げて、皿の兩端を手に取り、チューとスープを吸はれた。そこで吾々一同大いに安心し「さあ、やらうではないか。」

と有難く頂戴した」と。

真心が中にこもつてをれば、言ふこと爲すこと多少拙なくとも、人を動かすものであります。西諺に曰く

「拙なく行ふは、巧に言ふに勝る。」(偉人言行録参照)

(四) 我が身をかへりみよ

曾子曰吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。(學而第一)

【讀方】 曾子曰く、吾日に三度吾が身をかへりみる。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。傳ふて習はざるか。

【語句の意味】 ○曾子 孔子の門人、孝心の深かつた人、○三度吾が身を省る 自分の行について、たびたび反省する ○忠 まごころをつくすこと ○信 うそいつはりをはぬこと(誠をつくす。) ○傳ふて習はざるか 師か傳へられたことを十分に習つておぼえ込まないかどうか(之は習はざるを傳ふるかなども讀む)

【お話】 他人の缺點短所はよくわかるが、自分のことよくなるよくわからぬもの、自分を知るといふことは誰にしても餘程困難なことであります。それ故昔の人も「己れを知れ」と戒めてをります。殊に得意の境遇に居るといふやうな場合には、人は兎角いゝ氣になつてついうか〜と日を送り又其の心持が大ざつぱになつて、なんでも

いゝ加減に考へたり、爲たりし易いものであります。

しかしながら、何事もよく／＼つきつめて見ると、どんなに太平無事のやうに見える時にでも、眞面目に眞剣に考へて見なければならぬことがあります、しつかと實行してかゝらねばならぬことがあるのであります。若しも之をおろそかにすれば、遂には我が身の破滅、社會の混亂を來すといふはめに陥るより外はありませんまい。ですから何時如何なる場合にも反省といふこと即ち自分の身をかへりみて警戒することが最も肝心かと思はれます。

反省すべきことは多々ありませうが、とりわけ對人的關係即ち人に對する關係といふものは重視せねばなりません。

そこで人の爲めに謀つて親切丁寧、誠心を打込んで、よく行届いたことが出來てゐるかどうか、自分の我儘氣儘から人につらく當るやうなことは無いかどうかと反省する。それから又友あるが故に樂しみ友あるがある故に幸福を得て居る、その友をない

がしろにして不實のことをしたり、約束を破つて迷惑をかけたりますやうなことは無いかどうかと反省する。尙又、學問をろく／＼勉強もせず熟練もせずに、之を人に傳へて、輕はづみなことを言つたり、いゝ加減なことをしたり又、先生から傳へられた教へをなほざりにして未熟のまゝで放つておいたりしてお茶を濁してゐるやうなことは無いかどうかと反省する。かうして日毎毎に反省して一日々々自分の人格を進めることに氣をつけてゐると、孔子の秘藏弟子たる曾子は申してゐるのであります。「人のふり見て、我がふり直せ」といふ諺もありますが、人は常に我がふりを直すことに氣をつけねばなりません。そして其の上、我が家を知り、我が國を知り、家族の一人として又國家の一員として踏むべき道を誤らぬやうにしたいものであります。時々己が心を、かへりみよ、

人たる道を、踏むやふまずや。

【例話】 自分が見えない人 碁の好きな主人があつた。或日仲間の者と呼んで、しきりに碁をう

つてゐる、其の日はどういふわけか、自分の方がだんく負けさうになつて來た。主人は碁盤を見つめてしきりに考へこんでゐた。それでも好きな煙草が止められないと見えて、口にはきせるをくはへつゞけてゐた。煙草の火は何時の間にか消えてゐたのである。けれども碁に夢中になつてゐる主人は、煙草の火の消えたことなどには氣がつかない。火の無い煙草をしきりに吸つてゐる。次の間に裁縫をしてゐたお嫁さんが、そのやうすを見てかう言つた。

「まあ、をかしいこと。火の消えた煙草をしきりに吸つてゐらつしやる。何でも夢中になると、あんな馬鹿げたことにも氣がつかなくなるものかしら、あら、まだ吸つてゐらつしやるわ。」

お嫁さんは針を動かしながら、一生懸命に主人の様子を見て笑つてゐる。すると何時の間にか開けて、置くはずの袖口までも、うっかり縫ひつぶしてしまつた。臺所に御飯をうつしてゐた女中が此の様子を見てくすくす笑ひ出した。

「おやく、奥様が御主人の方に氣をとられて、あんなことをしてゐらつしやる。あれぢや、手の出るところが無くなつてしまふわ。自分の仕事を忘れて、あらく、とうく、袖口を縫ひつぶしてしまつたわ。」

女中はかういつて、お嫁さんの方を眺めてゐた。するとうつしたはずの御飯はお鉢の中に入らないで、板の間にはだんく御飯の山が出來て行つた。けれども女中はまだ氣がつかない。お釜から御飯をすくつては、しきりに板の間に盛り上げてゐた。土間に座りこんで、わらぢを作つてゐた年寄りの三吉が之を見つけて、大口を開いて笑ひ出した。

「なんだあのさまは。夢中になつて人のことばかり見てゐるから、かんじんな自分の仕事が出来やしない。御飯を板の間に盛り上げちや、食べられないぢやないか。本當にしやうのない女だな。」
三吉はかういつて、一生懸命に女中の方を見てゐた。すると何時の間にか、作つてゐるわらぢの長さが三尺にもなつてしまつた。(副國語讀本)

(五) しつかりとした修養

子曰君子不重則不威。學則不固。主忠信。無友不如己者。過則勿憚改。(學而第一)

【讀方】 子曰く君子重からざれば則ち威あらず學べば則ち固ならず。忠信を主とし、己に如かざる者を友とするなかれ。過つては則ち改むるに憚るなかれ。

【語句の意味】 ○重からざれば威あらず。重みがなければ威嚴がない。○學べば固ならず。學問をすれば固陋に陥らない。○忠信を主とす。まじめなまごころの人を重んじて親しむこと。○己に如かざる者を友とするなかれ。自分よりも劣つてゐるものは親切にしてはやるが修養上の友とはするな

【お話】 人として多くの人から尊敬され可愛がられていくといふことは、確に一生の幸福でありまして誰しも之を望まぬものはありません。しかし尊敬され可愛がられるには、その人にそれだけの美點がなければなりません。何の値打も備はつてゐないものを、ただく尊敬したり可愛がつたりするはずはありません。

それにはまづ内からも外からも自分を磨き向上させることが肝要でありませう。人は心が第一で何もかも心が本でありますが一寸見ても少しも落附かず、重々しいどつしりしたところがなく、きよとくとしてゐて、人の話を聞き違ひたり、感違し

たり又自分の言ふことも、つじつまが合はなかつたり、言ひそこねをしたり、そしてその上何をするにも間違ひなどばかりしてゐるやうでありましたら威嚴などは少しもなく、いかにも輕卒な人として人から侮られ嘲けられ笑はれるより外ありません。

しかし又外は重々しくても、その考へが古くさくて頑固で一向物わかりが悪く頭の融通がきかぬやうでは、これ又人からさげすまれるより外はありません。

それ故、自分の天分を伸びるつたけ伸ばし人からも敬愛せられて幸福な一生を送らうとならば孔子の申さるゝ通り、先づ内からの要求に基き、人類の爲に役立つやうな高尚な志を、しつかと立て、どつしり落附いた態度を造り又學問をして物わかりのよい人となり頑固に陥らぬやうにと心掛け又人と交はるにも忠信の人を第一としてこれに親しみ、自分としても、うそいつはりやいはぬやうにし少しづつでも自分を高め深めるためには己以上のすぐれた人に交はるやうにし若し過でもあつたら、すぐに改めるといふやうにする事が大切であります。しかし「己に如かざる者を友とする勿

れ」と言つても考違をしてはなりません。寧ろ善きをとり惡しきを捨てるといふ風にしてゆけば己に如かざる人にも大いに學ぶべきところがあるものです。かういふ人に對して一概に冷淡な態度をとるといふことは誠に、にが／＼しいことでありますから、修養上の友とはしないにしても出来るだけ親切に仲善く交はるやうに注意しなければなりません。

輕卒と理窟わからぬ偏窟は

誰も相手にする者はなし。

【例話】 修身のめあて、昔支那の東漢の世に馬援といふ將軍がありました。交趾といふところに出征して居た時、手紙を送つて兄の子を戒めていふやう

「自分はお前が人の過失を聞いても、父母の名前を聞くやうにして欲しい。(支那では子は父母の名を) 耳では聞いても、口では決して言はないやうに心掛けねばならぬ。好んで人の長所短所を議論したり、御上の政治法律等を是非したりすることは、自分の子孫にはどうかして貰ひたくないもの

だと思ふ。あの龍伯高といふ人は、物事にてあつく親切で、如何にも慎重深く、其の上、謙遜でつゝまやかに、儉約な人である。自分は此の人を愛してゐるばかりではなく、非常に尊敬してゐる。どうかお前達は此の人を手本として貰ひたい。杜季良といふ人は、大そう俠氣があつて節義を好み、人の憂は自分の憂と心得、人の樂はやつぱり自分の樂しみと心得てゐるといふやうな痛快な人物であつたから、自然人望も厚く、其の父が死んだ時などは、數ヶ郡の人々が残らず會葬するといふ有様であつた。自分は此の人を愛してゐるばかりではなく、非常に尊敬をしてゐる。併しお前達が此の人を手本とすることは希望しない。何故かといふと、あの伯高を手本とすれば、萬一出來損つても、まだまだ慎重深い人となることが出来る。鵠を刻んで出來損つても、まだ家鴨に似てゐるからよいといふわけだ。ところが季良を手本とすれば、若し出來損つたら、それこそ大變、墮落して天下の輕薄な人物となるであらう。虎を畫いて出來損ひ、似てもつかない狗のやうなものになるといふのはそのことである」と。(十八史略)

(六) 立派な人の生活ぶり

子曰君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、就有道而正焉可謂好學也已。(學而第一)

【讀方】 子曰く君子食は飽くことを求むるなく、居は安きことを求むるなし。事に敏にして言を慎み、有道に就て正さば、學を好むといふべきのみ。

【語句の意味】 ○食は飽くことを求むるなく 食事はおいしいものを腹一杯食べようとはしない ○有道に就て正さば 若し疑ひでもあつたら道徳家について質問して自分の行を正すならば

【お話】 「腹の皮が張れば眼の皮がたるむ」といふことをよく申しますが、少年の頃は、おやつやお三時は何よりの好物であります。殊に小學六年から中等學校に進む頃になると身體がめき／＼と發達すると共に食慾も猛烈になつてまゐります。随つて間

食はあるか、三度の食事にも兎角心が奪はれ勝ちになります。爲に節制の無い人は腹一杯に食物を取りますので食後はもうがつかりして眠氣を催し何時の間にかこくりこくりと始めます。これじやならぬと氣を勵まして見ますが思ふやうにならずに仕方が無い、もう寝るとしよう。寝る程樂があるものか」と自分勝手な理窟をつけて休んで仕舞ひ大事な日課も棄て、顧みぬといふ日が幾日も續くといふことになります。そして自分で自分を持てあまし「どうも僕は頭が悪くて困る」などとかこつたりする。しかし元を正せば大食が禍の種となつてゐるとは氣がつかぬのであります。そこに氣がついたら何よりの幸福です。すべて人柄の立派な有徳な人といふものは、とうに、さういふことに氣がついて居りますから、平生の心掛がよく、食物を飽く程とつたり、住居も分に過ぎた立派な家には住まず、そして、その行はと見ると機敏に爲すべきことはさつさとやつてのけ、しかも、おしやべりや、みだらな言葉は差控へ、よく口を慎みそして有徳の人に近づいては自分の行の善惡を正して萬事そつのない

やうにと心掛けます。之が本當の學問好きといふべきものだと言せられました。學問があるの大學を出たのと申しましても日々の生活が、このやうにいかなかつたら本當にはづかしいことではありませんか。

衣食住あつさりとして、すべきこと

さつさとすれば心、満腹

【例話】 フランクリンの修養 フランクリンは深く修養に志し、善い習慣を作るために修徳表といふものを作つて、日々の言行を細く省みました。修徳表に擧げた徳目は十三で、其の名稱と意義とは次の通りであります。

- 一、節制 飽くまで食ふな、酔ふまで飲むな。
- 二、寡言 自他を益することではなければ言ふな、無用のおしやべりを慎め。
- 三、規律 日常の器具は其の置場所を定め、業務の時間は厳しく守れ。
- 四、決断 事業にとりかゝる場合には、必ず完成を期せよ。一旦決したことは飽くまでも爲し遂げよ。

よ。

- 五、節儉 自他に利益のある場合でなければ、金を使ふな。むだづかひを慎め。
 - 六、勤勉 時間を空費するな。常に必要なることに力を盡して、不必要なことはするな。
 - 七、誠實 他人を害ふやうな虚言を吐くな。無邪氣に正直に考へ、口を開いたら心中をありのままに語れ。
 - 八、正義 他人に害を加へるな。又己のなすべき本分を怠つて、他人に累を及ぼすな。
 - 九、中庸 極端に走るな。當然責むべきことも、思ふ存分に責めるな。
 - 一〇、清潔 身體・衣服・住所を不潔にしておくな。
 - 一一、安靜 些細な事に狼狽し、尋常一般の出來事に度を失ふな。
 - 一二、貞操 (男女のおつきあひを正しくすること)
 - 一三、謙遜 キリスト及びソクラテスを手本とせよ。
- まづ一冊の小さな帳面を用意して、その一頁に一徳づゝ配當し、圖のやうに一週間分の記入が出来るやうな縦横の罫を引いて、縦の七欄には曜日、横の十三欄には徳目を記入しました。そして

毎晩反省して過があれば、其の日の欄内に黒星を打ちました。
併し十三の徳を一度に修養しようとするれば、却つて注意が亂れて、どの徳も十分に修めることが出来ないおそれがあるので、一つづつ順次に修める工夫をしました。

即ち第一週は特に節制の徳を修めることを専とし、他の徳は平素のまゝにしておいて、毎夕其の日の過失を反省することに止めます。次の週は寡言の修養に特に力を盡します。かやうにして十三徳を一年四回反覆して、修養を積む間に、黒星が次第に少なくなつていきました。フランクリンは其れに力づいて、黒星が一つも無くなるやうにしようとなつて努力しました。

節		制	
飽くまで	食ふな	酔ふまで	飲むな
日	*	*	*
月	*	*	*
火	*	*	*
水	*	*	*
木	*	*	*
金	*	*	*
土	*	*	*

徳目中の「規律」に就いては、時間を正しく守る事が第一であるからと言つて、一日二十四時間の時間割を定めました。そしてそれを日課表と呼びました。

朝	午前	正午	午後	夕	夜
五時—七時	八時—十一時	十二時—一時	二時—五時	六時—九時	十時—四時
起床・洗面	仕事	讀書	仕事	片付け・夕食	睡眠
祈り・豫定	會計検査	晝食	音樂・娯樂	會話・反省	
勉強・朝食					

日課の一つとして、朝は必ず「今日は如何なる善を爲すべきか。」を考へ、夕は必ず「今日は如何なる善を爲したか。」を省みることも時間割の中に書き加へておきました。
始の中は此の日課表の實行が困難でありましたが、漸次規律正しく一日を過すやうになつたので、フランクリンは大そう嬉しく思ひました。(偉人の生涯参照)

(七) 貧者富者の戒

子貢問曰貧而無諂、富而無驕何如。
子曰可也。未若貧而樂、富而好禮者也（學而第一）

【讀方】

子貢問ふて曰く貧にして諂ふ無く、富んで驕る無きは如何。

子曰く可なり。未だ貧にして樂しみ、富んで禮を好む者に若かざるなり。

【語句の意味】 ○子貢 孔子の弟子 ○諂ふ おべつかをいふ ○驕る 誇高ぶる ○貧にして樂しむ 貧乏であるて道德を樂んで行ふこと

【お話】

人には各自境遇の相違がありまして、同じやうな行をするにしても境遇によつて非常に實行が困難なものであります。ですから、その境遇を見てから人の行を判断するといふことが大切です。

お金に不自由がなければ、親の好むものを買つて差上げることは、大そうやさしいことであります。が貧乏で何向き不自由ですと、餽一つ差上げるのにも、なか／＼の苦

心であります。そこで貧乏でありながら親の満足するやうにしてあげるといふことは、その人の非常な苦心努力が加はることでありますから、その行は非常に貴いものとなるわけであります。

しかし貧乏でなければ親孝行が出来ないといふわけのものではなく、お金持にはお金持として親孝行があります。即ちお金持はお金に不自由が無いのですから物を買つて差上げるには別に苦心はありませんが毎日一日の勤務を終り疲れ切つてゐるところを雨が降らうが風が吹かうが必ず御両親の居所をお尋ねして御機嫌を伺ふといふやうなことは、お金があつたからとて出来るわけのものではなく、之はその人の誠心孝心の、あらはれであつて、誠に立派な行と言はなければなりません。

すべて此のやうに、その境遇としては非常に困難なことを美しい心から忍耐と努力によつて立派な行をするといふことは貴ぶべきことであります。

それで子貢が孔子に向つて貧乏であると兎角 頼り少いところから人に諂い易いも

のである。又福しいと兎角、自由がきくところから驕り高ぶり易いものである。して見れば貧乏でありながら諂はない、富んでゐながら驕らないと風であつたら立派なものだと思ふが如何でせうかと尋ねますと、孔子は、それはまづ結構である、しかし上には上がある、貧乏で諂はないからと言つても、それは貧乏してゐながら貧乏を苦にせず人の道を樂しんでゐると言ふ風の者には及ばない。又富んで驕らないと言つてもそれは富んでゐながら、禮節を好み、心をひきしめて之を實行するといふ風のものには及ばないと申されました。貧賤の人、富貴の人の心掛として何とよい戒ではありませんか。

へつらひと驕り高ぶりせぬとても、

上に上ある行を見よ

【例話】昔支那に魏といふ國がありました。王の文侯の子の擊といふ。人が其の師の田子方といふ人に途中で出逢つたので、態々自分は車から下りて挨拶をしました。ところが子方は何を考へた

か答禮しようとしません。そこで擊は大そう怒つて、「一體富貴の者が人に驕り高ぶつてよいのか。それとも貧賤の者が驕り高ぶつてよいのか、とんと合點がいかぬことだ。」と申しました。すると子方は、「それは貧賤の者が人に驕るのが當然であります。富貴の者はどうして人に驕ることが出来ませうぞ。一國の君で人に驕れば、結局人心が離れて其の國を失ふやうになります。大夫で人に驕れば、結局其の家を失ふやうになります。唯士の貧賤な者だけは、そんな心配は御座いませぬ。何處へ往つても貧賤だけは得られないことはありませんから、驕つたつて差支ないわけでありませぬ。」と申しました。

○ 貧賤の人だとして驕つてよいわけはありませんが、富貴の人の驕は一層恐ろしいのであります。

○ 賢にして財多ければ、其の志を損ず。

愚にして財多ければ、其の過を益す。(十八史略)

○ 有名な貝原益軒は、次のやうに申してゐます。

「富貴の子に生れては、幼き時より世のもてなし、人の敬、厚くして、よろづ裕に、心のまゝなる世界の榮華にのみ耽る習しなれば、恐れ慎む心なく、驕り日々長じ易く、戯れ遊を好み、人の諫を嫌ひ惡む。況や學問などに身を苦しめんことは、いと堪へ難くして、富貴の人のする業にあらずと思ひ、むつかしく、いたつかわしとて疎んじ嫌ふ。かゝる故に、驕を抑へ、身をへり下り、心をひそめ、師を尊び、古を考へずんば、如何にしてか心智をひらき、身を修め、人を治むる道を知るべきや。」

(八) 志を立てよ、努力せよ

子曰吾十有五而志於學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩。(爲政第二)

【讀方】 子曰く吾れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず

五十にして天命を知り、六十にして耳順ふ。七十にして心の欲するところに從へども矩を踰えず。

【語句の意味】 ○三十にして立つ 三十歳になつて一通り學問も成就し自分の見識が成立した ○天命を知る 人力の及ばないところのあることを悟ると共に信仰心が強くなる。○耳順ふ 人柄が立派になり何を聞いても耳に逆はない程に物わかりがよくなつた。○矩を踰えず 人道を離れたり道徳に背いたりしない。

【お話】 こゝろ、こゝろで、われわれの心といふものは兎角 動き易いものであります。ちやうど川のながれが流れますやうに始終流れ流れて止みません。ですから少し心をゆるめるものなら、どこまで流れ流されていくことやらわかりません。このやうに變り易く、動き易く流れ易いところの心ですが、此の同じ心に 志といふものが成立ちますと即ち心の目當といふものが出來てまゐりますと今までは全然、様子が變つて、ずつと静まりかへり、どつしりと落附いてまゐります。かうなると、もう生れ變つたやうな人になりますから誰も目を拭つて見なければならぬやうになります。君

子豹變」とは、つまり之を言ふのでせう。之を心の御誕生と申してもよいかと存じます。その志が高ければ高い程、深ければ深い程、それだけ高尚な深みのある人となるわけでありませう。しかし一旦志がきまつたからといつても、その志を完成するまでの努力が並大抵ではございませぬ。一生をあげてしてもなかく完成されないやうなこともありませう。ですから志は成るべく早く立つ程、よいかと思ひます。孔子の志は早くも十五の時に、きまつたのでありましたが三十には、もう一かどの見識が立つまでになりました。とは言ふもの、真理の山は峯が多い。實際となると決して兼ねることも、まゝあるといふ次第、ところが四十には、もう正邪善惡に迷はなくなつた次で五十になると人力の及ばないところのあることを悟り、六十になると何を聞いても又どんなことに出席つても少しも疑問を起さない程に大そう物わかりがよくなり、最後に七十となると、もう自分の心の向くまゝに自由に行つても人道に背き秩序を破るやうなことは無くなつたとの仰せでありますが一度志を立てゝから、たへず

進歩してゐた孔子は、ほんたうに、えらいではありませんか。小學六年から中等學校にかけては志を立てるのに最も肝心な時期でありますから、醉生夢死に終らぬやうにまじめに眞劍に考へていかねばならぬと思ひます。

目的を立てゝ仕事を爲さざれば

舟と同じく 何時も ふらく

【例話】 頼山陽の立志 山陽は十三歳の時に、慨然として自分も古來の歴史に載つてゐるやうな

偉大な人物にならうといふ志を起した。彼れ一詩を作り、志を述べていふには、

十有三春秋 逝者已如レ水。

天地無二始終一 人生有二三生死。

安得レ類二古人一 千載照二青史一。

と。其の歲月の流るゝが如くにして、人生の再び得べからざるを嘆じ、古人の如き偉業を爲し遂げて草木と共に空しく朽ちざらんとするの志がよく見えてゐる。

凡そ人は少年の頃に、山陽の如く精神の底から感激した高尚な志が起らねばならぬ。禽獸の如く眼の前の苦樂に心を動かされ、飲食や遊戯などにのみ注意を奪はれてゐるやうなものは、とても眞の價値のある貴い人にはなれない、少年の時に志の立つのは、暗夜東天に曉の光を望んで勇み立つと同様で、進歩の道は之から開けて來るのである。

此の翌年、即ち十四歳の夏に、山陽は父の書物の虫干をして居つて、ふと蘇東坡といふ文章の大家の歴史上の論文を見て、天下に此のやうな愉快な文章は無いと、手を拍つて感嘆し、之から自分も文章に力を入れ、歴史を研究し、勤勉に勤勉を重ねて、終に國民の精神を引き立てるやうな偉い歴史家となつたのである。(少年鑑)

孟子の修業

昔支那に孟子といふ賢人が居つた。孟子は少年の頃、學問修業のため遠い地に行つてゐた。永らく家に歸らなかつたから、一人の母のことが心配でならず、

「どんなにか淋しくしてゐらつしやるだらう。一度あつて御様子を知りたい。」

と、思ひ立つと、もう堪らなくなつて、學問をしばらく休むことにして、家に歸つて來た。幾年ぶ

りで、懐かしい我が家の門に入つて見ると、折しも何氣なく機を織つてゐた母は、ふと目をとめて

「まあ、どうして今頃歸つて來ました。學問は十分に進みましたか。」

と、屹となつて問詰めた。孟子は何と答へてよいやら、たゞおどくして、顔をあからめながら、

「はい、あの學問はまだ進みませんが、お母様が戀しくなつたので……。」

といふ。母は顔色をかへて、物も言はずに、傍にあつた双物を取上げ、惜しげもなく、織りかけた機を斷切つてしまつた。

孟子は驚いて、

「なぜそのやうなことをなさいますか。」

といふと、母は容を改めて

「お前は此の機をよく見るがよい。今斷切れれば今まで織つたのは、皆無駄になつてしまふ。學問も

その通り、途中で心をゆるめたら、是まで習つたのは、何の役にも立つまい。それを知らぬはず

はなからうに、今歸るとはどうしたことであらう。おろか者め！」

と叱りつけた。

孟子は、此の誠に深く恥ぢ入つて、我が不心得をあやまつたのであつた。そして心を入れかへて再び修業に出て、一心不亂に勉め勵んだから、遂に大賢人と言はれる程の優れた人になつたのである。まことに味ふべき話ではないか。(趣味の修身讀本)

(九) 父母の心配、病の用心。

孟武伯問孝。子曰父母唯其疾之憂。(爲政第二)

【讀方】 孟武伯孝を問ふ。子曰く父母は唯其の疾をのみ之れ憂ふ。

【語句の意味】 ○孟武伯 孟懿子の長子、名は旼

○父母は唯其の疾をのみ之れ憂ふ。父母は其の子の病氣を切に心配するものだから、體に氣をつけて心配かけぬやうにせよといふこと。

【お話】 笹の葉が、カサカサと動いてもクス／＼と笑ふのが少年少女の特色かと思ひますが、又一度笑ひ始めると笑つて笑つて笑ひくづれ、横腹の痛くなる程笑ふ

こともあります。

それにひさかへ年寄になると大ていおかしいことがあつても一向笑ひたくないものであります。

大人の人をくすぐつても一向平氣なお顔をしてゐるでせうが子供のくすぐつたいところを向けやうものなら、まだ手のとどかぬ先から、もう盛に笑つてゐます。

なぜさうかと言へば少年少女の體は之から伸びて行かうといふ矢先ですから、其の體はやわ／＼して固まらず、感覺が非常に鋭敏だからで主としてその生理的關係によるものだと思ひます。

かういふ元氣な快活な子供らしい子供は何時見ても氣持のよいものであります。まして父母は自分の子供の丈夫で元氣なのが何よりのよろこびなのですから病氣にか

かゝつて心配をかけないやうにせねばなりません。それに子供の時は風邪をひく腹が痛むといふ風に兎角病氣にかゝり易いものですから、注意してさへ病氣になつて親に

心配しんぱいをかけることが少すくくありません。

元來親の子供に對する心配は一つや二つではなく其の成長と共に數限りなく心配の種があるのですから、せめて病氣以外では餘計な心配をかけぬやうに常に自立自營の精神を發揮して親の心を安んずるやうにしたいものであります。

それには先づ飲食を慎み養生を怠たらず、我と我が健康状態をよくして何時もにくしてをられるやうに心掛けたいものです。それが親孝行の始だと思ひます。

人の前でいくらにこやかにしたいと思つても健康を損じ氣分が引立ちませんと思ふ通りにいかぬことは我々のしばしば経験するところであります。

體が弱いとどうしても氣むづかしくなり沈みがちになつて兎角心配の種を播き易いものですから、よくよく注意したいと思ひます。

子を思ふ親ほど親を思ひなば

病にかゝるすきは無からん。

【例話】 父の愛 昔、猿樂の鼓打に評判の青年がありました。老巧な名手も舌を巻いて感心する程、上手でありましたから、自分からも鼻を高くしてゐました。

或日、猿樂の大會があつた時、此の青年はその場に臨み得意の曲を奏しました。するとその音色といひ、拍子といひ、何ともいひやうがないと言つて人々が大そう褒めそやしましたので青年は誇顔して幕に入らうとすると、そこに父がゐて、いきなり鼓を奪ひ取つて投げつけ、

「どこがいゝといふのだ。下手で下手でとても聞けやせぬ。貴様はもう鼓打を止めるがいゝ。」と言つて、きつと叱り附けました。

青年は父にも褒められると想ひの外、大そう擯斥されたので、一時は腹立ちまぎれに鼓打を止めようかと思ひましたが、ふと思ひかへし、

「いや、父があゝおつしやるのもみんな自分が悪いからだ。今から一層勉強して、父の心を休めよう。」

と、これから晝夜、練習に練習を積みましたから、遂に此の上なしの名人となつたと申します。

此の青年も一時は自分の器用をたのみ速成を夢みて、小成に安んじようとしたから、父はその前

途を心配して教へ諭したのでありました。此の青年は後日父の慈愛をしみぐと感ぜ、弟子を誨へる時に

「自分の今日あるは、實に父の賜である」

と言つたといふことです。

叱る父の心をよく汲まなければなりません。(真人の生活参照)

母の愛

昔、ローマに、コルネリヤといふ才貌兼備の婦人があつた。二人の男の子を持つてゐたが、何れも利發な性質である上、生まれてからかぜ一つひいたこともない程丈夫であつた。

或日コルネリヤは、二人の子供を連れて、久しく會はなかつた友達の家をたづねた。其の人は金持の家に嫁入して、ぜいたくな暮らしをしてゐる貴婦人である。友達は、金にあかして髪飾、身の飾花も恥ぢらうばかり装をこらしてゐるのに、これに向つて座したコルネリヤの身なりは極めて質素で、飾としては何一つ着けてゐない。けれども自然に備はる其の氣品には何處となく犯し難いところがある。

山海の珍味を集めた馳走の後、話は移り移つて衣服・寶玉のことに及んだ。友達は侍女に言ひつけて、美しい小箱の數々を持つて來させた。蓋をあけるとどれにも見事な寶玉が入つてゐる。牛乳のやうに白くてすべ／＼した眞珠、いちごのやうに赤くて美しいルビー、眞夏の空のやうに青いサファイヤ、星のやうにきら／＼するダイヤモンド、どれを見てもまばゆい程光りかゞやいてゐる。子供二人は、「こんな寶石が一つでもお母さんにあつたら。」といふやうに、寶石を見守つた。

貴婦人はほこりに之を求め得た來歴を説いてゐたが、やがてコルネリヤに向つて、

「いづれあなたもお珍らしいものをたくさんお持ちでございませう。其の中拜見に上りたうございませう。」

と言つた。コルネリヤは、

「いえ／＼。私は寶石などは一つも持つて居りません。」

「おや、ではあなたは、何を樂しみにしていらつしやいます。」

「私は唯此の子供二人を何よりの寶と思つて居ります。」

といつて、二人を引寄せて、うれしさうに頭をなでた。二人は目に涙をたゞへて、母の顔を見上げ

た。

此の二人の少年こそは、後に大政治家としてローマの歴史を飾つた英雄である。二人は何か困難に出會ふ毎に必ず此の時の事を思ひ出して奮勵したのであつた。

味へば味ふ程、味のあるお話ではありませんか。(小學教科書参照)

(10) 馬鹿どころではない

子曰吾與回言。終日不違如愚。退而省其私亦足以發回也不愚。

(爲政第二)

【讀方】 子曰く吾れ回と言ふ。終日違はずして愚なるが如し。退いて其の私を看れば亦以て發するに足れり。回や愚ならず。

【語句の意味】 ○回 孔子の弟子顔回で徳の高い人 ○終日違はずして愚なるが如し 孔子が何を言はれ

ても一日中たゞ黙つて聞いてゐるばかりで何も質問などせぬから、物のわからぬ愚者のやうである。○退いて其の私を省れば 退いてその家に於ける有様を見ると ○亦以て發するに足る 孔子の教を理解しその道を發明實現するに足る人物である。

【お話】 2に2に足す4といふことは、はつきりと言ひ切ることが出来るでありませうが、人間に對して、あれは馬鹿だ、あれは利口だ、賢だ愚だといふことは、さうたやすく言へるものではないと思ひます。それだけ人間といふものは萬物の中でも特に深味のある味のあるものであります。

世には随分さかしい人だ、利口な人だといはれて、人からもてはやされてゐる人でありながら、どうかすると随分馬鹿げたことのために身を誤り、家を滅すものも少くありません。さうかと思ふと一見愚かしい人で人から嘲られ、さげすまれてゐるやうな人でありながら、じわり／＼と自分といふものを築き上げ遂に世の中で押しも押されぬ人になつて貴い一生を送る人もあります。